2 随筆

単元のねらい

◆『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉える。
◆文語助動詞の種類と用法を理解する。
◆作者の主張を読み取り、批評する。
・現代にも十分通じる作者の主張を正確に捉え、そこから作者のものの見方や考え方、論の立て方がどのようなものかを考える。
・文意に重要な役割を担っていることが多い助動詞の種類と用法を理解することで、内容を正確に捉え、現代語訳できるようにする。
・論の立て方が異なる二つの章段の構成を比較し、作者の主張の仕方について、意見を交換させる。
今に生きる古文の世界を自分の知識として活かし、作者の考え方や感じ方を通して、自らの生き方を問い直すきっかけともしたい。

単元の構成

「徒然草」から四つの章段と、参考教材として序段を取り上げた。「亀山殿の御池に」は、名人譚のひとつで、まず逸話を語り、作者の主張で結んでいる。「大事を思ひ立たん人は」は、無常迅速という認識を根底に据えた、道念についての章段で、冒頭から主張を前面に押し出し、その後に例話や比喩を述べる構成である。「奥山に猫またといふものありて」は、対象を冷静で客観的な視点で描く、作者の筆致の特徴を読み取ることができる。「花は盛りに」は、作者の美意識ついて、物の見方、捉え方がはっきりとした形で提示されている章段で、作者の論の展開の仕方について各自の考え方を持たせる。参考「つれづれなるままに」では、名文の調子を味わい、暗唱に挑戦させたい。
「古文を読むために4」では、助動詞について説明している。古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりにつ

いて学習できる。

「古文の窓１　無常の世を生きる」では、中世の文学作品に大きな影響を与えた「無常観」について、「平家物語」や「徒然草」などの文章を引用しながら、分かりやすく解説している。

「単元の言語活動２　作者の主張を読み取る」では、例話や比喩を語った後に主張を展開する「亀山殿の御池に」と、冒頭に主張を置き、その後に例話や比喩を述べる「大事を思ひ立たん人は」から、作者の主張を読み取り、文章の構造を比べて、どちらの形式が分かりやすいと思うかについて、意見を交換する。

随筆

教材のねらい

1 選定の理由

「徒然草」は、三大随筆の一つと言われ、高い評価を受けている。古文のおもしろさに触れるために、バラエティーに富んだ内容の作品から「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」「奥山に猫またといふものありて」「花は盛りに」の四つの多様な章段を読む。さらに、参考として随筆の本質を記した序段にも目を配ることができるようになっている。作者の考え方や感じ方を通して、自らの生き方を問い直すきっかけともしたい。

「単元の言語活動２　筆者の主張を読み取る」は、「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」において、作者の主張がどこに書かれているかを読み取らせ、論理的な文章の構成を学ばせることをねらいとしている。

2 指導のねらい

(1) 作者の描く様々な人間の姿から、人間の本質を読み取り、自らの生き方を振り返るきっかけとさせる。
(2) 作者の主張がどのように展開されているのかを捉え、論理的な文章の構成を学ばせる。
(3) 随筆の本質とは何かを学んだうえで、作者の考え方や感じ方と自らの考え方、感じ方を比較しながら、ものの見方を深めさせる。

3 単元の目標

目標について、別表「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

学習指導要領との対応等	評価規準例	〔知識・技能〕						思考・判断・表現力等〕	
		(1)ア	(1)ウ	(1)エ	(2)イ	(2)ウ	(2)エ	B(1)ア	B(1)イ
		言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。	我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。	文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。	古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解している。	古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解している。	時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解している。	「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。	「読むこと」において、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
	亀山殿の御池に	○	○	○	○	○	○	○	○
	大事を思ひ立たん人は	○	○	○	○	○	○	○	○
	奥山に猫またといふものありて	○	○	○	○	○	○	○	○
	花は盛りに	○	○	○	○	○	○	○	○
	つれづれなるままに	○	○	○	○	○	○	○	○
	古文を読むために４	○	○	○		○	○	○	
	古文の窓１				○			○	
	単元の言語活動２	○	○	○	○			○	

〔主体的に学習に取り組む態度〕	〔思考力・判断力	
	B (1) オ	B (1) ウ
「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。		○
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。	○	○
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。		○
「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。		○
進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、作者の主張を読み取り、自分の身近にいる人から「その道を知れる者」を選んでその理由とともに発表しようとしている。	○	
進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、作者の主張がもっとも表れている一文を読み取ろうとしている。		○
進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文の描写を手がかりに作者の描く法師像について話し合おうとしている。		○
進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたについて話し合おうとしている。		○
進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、今までの学習を生かして、作者の主張を読み取り、批評しようとしている。		○

■言語活動例との関連（【　】は関連する指導要領の言語活動例）

単元の言語活動２　作者の主張を読み取る【〔思・判・表〕B(2)イ】

随筆

指導計画案

指導上の重点目標

【亀山殿の御池に】

1 「徒然草」や作者兼好についての知識を発表させる。
2 作者の論の展開のしかたを読み取らせる。
3 作者の考え方、感じ方を理解させる。

	学習活動	指導上の留意点
導入	❶「徒然草」と作者兼好について既習事項を発表する。知技	❶三大随筆のひとつであることや他の三大随筆を挙げさせる。また、作者兼好については出家遁世の身であることなどを押さえさせる。
展開	❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。知技 →**「言葉と表現」1** ❷二つの場面と作者の考察について、内容をまとめて理解する。知技 思判表 →**「学習のポイント」1** ❸「その道を知れる者」とはどのような人のことを言うのか、話し合う。思判表 →**「学習のポイント」2**	❶用言の知識を確実なものにする。語の意味に関しては特に形容詞、形容動詞の意味を正しく理解し、そこから作者の価値観を捉えさせる。 ❷「大井の土民」と「宇治の里人」を描いた場面を二場面とし、それぞれから対応する言葉を抜き出しながら、整理していく。 ❸「道」という語の持つニュアンスを感じ取らせ、「名人」等と結びつけて理解させる。
まとめと発展	❶「その道を知れる者」にふさわしい人を、身近にいる人の中から選び、どのような点で「道を知れる」と言えるのか、発表させる。思判表 主態 →**「言語活動」1**	❶何人かで思いつく人を、どのような点がふさわしいかと合わせて、幅広く挙げさせ、その中から考え進め、自分の選ぶ人を決めさせるなどする。

【大事を思ひ立たん人は】 1　作者の論の展開のしかたを読み取らせる。 2　作者の考え方、感じ方を理解させる。	**展開**	❶「大事を思ひ立つ」ことを妨げるものを整理させ、まとめさせる。知技 思判表　→**「学習のポイント」1** ❷「少し心あるきは」とは、どのような人か、話し合わせる。知技 思判表　→**「学習のポイント」2** ❸本文中の近所の火事の例の表現上の効果について考えさせる。知技 思判表　→**「言葉と表現」1**
【奥山に猫またといふものありて】 1　話の筋を追って現代語訳する。 2　登場人物の心情を捉える。	**まとめと発展**	❶「少し心あるきは」はなぜ、「みなこのあらましにぞ一期は過ぐめる」のか、考えさせる。思判表 主態　→**「言語活動」1**
	展開	❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。知技　→**「言葉と表現」1** ❷「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったかを読み取る。知技 思判表　→**「学習のポイント」1** ❸「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動をまとめる。思判表　→**「学習のポイント」2** ❹最後の一文の表現上の効果を考える。知技 思判表　→**「言葉と表現」2** ❺作者が法師をどのような人物として描こうとしているか、考える。知技 思判表 主態　→**「言語活動」1**

	❶同じようなものはまとめて、大別させる。 ❷「少し心あるきは」を正確に現代語訳することで考えやすくなる。 ❸火事の例で言いたいことを簡潔に捉えさせ、それが作者の最後の主張に果たしている役割を考えさせる。
	❶「少し心あるきは」がどのように行動するかを前に挙げられた例と合わせて考えると、理由を捉えやすい。
	❶伝聞推定の助動詞「なり」に留意する。話の展開が追えるように現代語訳させる。 ❷どのようなうわさがあったかをまとめておく。「思ふ」という動詞を手掛かりにそのうわさへの思いを読み取らせる。 ❸現代語訳をもとに、法師の描写を丹念に追って行けばよい。 ❹「おち」のある話なので、その「おち」を効果的にしている構成について考えさせる。 ❺場面ごとの心情から、法師の人物像をまとめさせる。その上で仏道に励む者の一般的なイメージと比べるとよい。

【花は盛りに】

1　作者があげた例に従って、
2　作者の主張をまとめる。
　作者の感じ方や考え方についてどのように思うか、まとめさせる。
3　随筆の特徴を捉えさせ、作品に興味を抱かせる。

展開

❶ 古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。知技 思判表
→**「言葉と表現」1**

❷「花」「男女の情け」「月」のそれぞれについて、作者が好ましいと考えている状態をまとめる。知技 思判表
→**「学習のポイント」1**

❸「よそながら見る」とは、どのような態度か、読み取る。思 判表
→**「学習のポイント」2**

❹ 作者の立論のしかたの特徴を捉え、それをどのように評価するか考えさせる。主態
→**「言語活動」1**

まとめと発展

❶ 各章段における作者の主張をまとめ、さらにそれに対する自分の考えをまとめる。思判表

❷ 序段も参考にしながら、随筆の特色を理解し、作品内容の多様性に興味を持つ。思判表

❶ 係り結びや反語表現が作者の主張を効果的に見せていることに留意させる。

❷ 段落ごとに「花」「男女の情け」「月」と主題が分れているので、各段落を読みながらまとめさせる。一般的に好まれる状態と作者が好む状態とを対比的に捉えていくとまとめやすい。

❸ 物事の鑑賞態度のまとめである。「片田舎の人」の鑑賞態度が対照項目として挙げられているのでそれを参考にまとめるとよい。

❹ 反語の多用で、一般論を覆し、係り結びによって自分の主張を強調する作者のやり方を読み取る。その上で、作者の主張そのもののやり方について自分の考えをまとめる。自分で何かを主張する際の参考点や注意点とすることができるとよい。

❶ 各章段で読み取った作者の主張を改めて読み直させ、それに対する意見をまとめさせる。

❷ 序段の内容を整理させ、随筆の本質を述べていることを理解させる。そのうえで、読み取った各章段の内容の多様さを理解させ、他の章段への興味を抱かせる。

【単元の言語活動２　作者の主張を読み取る】

1　作者のもっとも主張したいことがどこに書かれているかを読み取らせる。

2　作者の主張に取り上げ方を比べ、意見を交換する。

展開	❶「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」で、作者がもっとも主張したいことが書かれている箇所を読み取る。思判表 ❷本文中で作者の主張がどのように扱われているか、考える。思判表
まとめと発展	❶「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」における作者の主張の取り上げ方を比べ、どちらが分かりやすいと思うか、意見を交換する。主態

	❶「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」で作者が最も主張したい箇所をワークシートに抜き出させる。 ❷「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」で、作者がもっとも主張したい部分がどの位置に置かれ、全体の構成がどのように組み立てられているか、確認させる。
	❶なぜ、分かりやすいと思うのか、その理由を具体的に示して意見を述べる。

徒然草

兼好

作者

兼好

神祇官の家柄である卜部氏の吉田流と言われる家系の出身で、古くから祭祀を職としていたが、祖父兼名の代に庶流となり、太政官としても出仕するようになっていた。なお、卜部家が吉田と称するようになったのは室町時代以降であり、江戸時代に捏造された「吉田兼好」という名は学問的に否定される。また、近年はその系図自体も否定する説が有力である。兼好の生没年については、「法金剛院過去帳」（「大日本史料」所収「諸寺過去帳」中）に「兼好法師　観応元年四月八日」とある記事その他によって、弘安六（一二八三）年生まれ、観応元（正平五）（一三五〇）年没とする説が行われてきたが、近年幾つかの資料が発見され、少なくとも、文和元（正平七）（一三五二）年までの生存が認められている。

▼略歴・業績

兼好は、後宇多天皇の妃で後二条天皇の生母である源基子（西華門院）の父、堀川大納言具守の家司であった。その縁で、後二条天皇のとき六位の蔵人となった。十九歳の頃とされる。そして、二十五歳の頃、従五位下左兵衛佐に任じたと推定されているが、政変によりその道は難しくなった。兼好の出家の時期は「大徳寺文書」（「大日本古文書」所収）によって三十歳代の初めであろうとされる。出家の動機については、主君の死などの出来事によるのではなく、「もっと私的で内発的な原因に導かれたもの」（「家司兼好の社会圏」）という風巻景次郎の推定がほぼ認められている。家集によって、出家前と出家後とに関東方面に下向していることが知られる。また、居所については、出家後に比叡山横川やその西方の修学院に住んだことが分かるが、出家後の本居については、山科小野庄とも、東山周辺であろうとも言われる。晩年は、洛西の仁和寺に近い双ケ岡に住んだようである。

兼好は歌人として名高く、頓阿・慶運・浄弁と並んで二条為世門下の四天王と称された。勅撰集には「続千載和歌集」（元応二（一三二〇）年、三十八歳頃）に一首採られたのをはじめ十六首が入集している。家集としては「兼好法師集」が残されている。「徒然草」の内容からもうかがわれるように、博学多識で、神道の他、仏教・儒教・老荘の学に知識と理解があり、和漢の文学や、特に有職故実の方面に豊かな知識を有していた。歌人としてはもとより能書家としても知られ、今日の言葉で言えば知識人・文化人として声望を博していたようである。このようにして出家後も俗世から離れることなく、その深い知識をもって貴族的なものから庶民に至るまで幅広く人間というものに関心を寄せたと言える。

兼好の生きた時代は、鎌倉幕府の威光が衰えていき、代わって足利尊氏が政権を取ろうという不安定な時代である。戦乱が打ち

続いたことが兼好出家の一因でもあろう。一方、兼好は平安王朝の文学隆盛の時代への憧れを強く持っていたとも言われる。戦乱を逃れ、山中で仏道修行に励みながら、平安王朝期への憧れを募らせる中で、兼好の美意識・価値観が育まれていったのである。そのような背景を頭に入れて、各教材を読み取りたい。

出典

▼底本

新編日本古典文学全集「方丈記　徒然草　正法眼蔵随聞記　歎異抄」（神田秀夫他校注、平成七〔一九九五〕年、小学館）によった。

同書は江戸初期の儒学者、三宅亡羊（寄斎）の書写したものを、烏丸光広が校訂した古活字本によっている。「徒然草」の伝本は数多く知られているが、この烏丸光広本の系統が流布本として近世以降の出版も非常に多い。昭和に入ってからの翻刻も多くこの本によっている。烏丸光広本の他には、正徹本系統、伝東常縁本系統、細川幽斎本系統などと分類される伝本があり、諸本の系統と、より原形に近い本文との問題が論じられている。「徒然草」の作者を兼好とするのは、年代明記の写本のうち最古のものである正徹自筆本（永享三〔一四三一〕年の奥書がある）によっており、定説となっている。

▼書名

正徹自筆本には「つれ〳〵種」とあるが、「徒然草」「つれ〳〵草」と書くのが普通である。全文を序段と第二百四十三段までとに分けるのは、江戸時代前期の歌学者北村季吟の「徒然草文段抄」に始まるが、古写本もほぼ同じような章段から成っている。もともとは独立の主題を持つ短文集として書かれたと考えられている。さらに、第百三十七段「花は盛りに」以下を下巻として上下二巻とすることも諸本ほぼ共通している。

▼成立

従来、橘純一が、作中の人名・官名・年号などを手がかりに、元徳二（一三三〇）年末から翌元徳三（元弘元）（一三三一）年秋にかけての約一か年間とした推定（「正註つれづれ草通釈」昭和十六、解説ほか）が定説として認められてきた。しかし、その後、諸本研究や内容の検討が進むに伴って、この橘説を超える幾つかの説が出されている。その中で、元応元（一三一九）年に第三十二段までが書かれ、元徳二年から元徳三年（元弘元年）にかけてそれ以下のほとんどが執筆されて、後にそれらがまとめられたときにいくらかの加筆補訂がなされたのであろうとする、安良岡康作説（「徒然草全注釈」昭和四十二・四十三、ほか）が説得力あるものとして注目されている。生没年に関する通説に従えば、「徒然草」の大部分の執筆は、兼好四十九歳頃のことである。

▼時代背景

兼好の四十歳代の社会情勢は、後醍醐天皇を中心にした大覚寺統と持明院統との対立が政治的危機として緊張の度を加え、ついに朝野における対立抗争の火ぶたが切って落とされるというものであった。さらに五十歳代は建武の中興から南北朝対立時代に至る動乱の時代であった。しかし三十歳代の早い頃に出家した兼好はこれらの争乱とかかわらず、世外の知識人として生きたようである。一種の自由人として激動の時代を生きた人の、社会と人間

とへの関心が生み出した文学が「徒然草」であると言えよう。

▼内容

多岐にわたっていて分類しにくいところもあるが、大別すると、「趣味的記事」「思想的論述」「説話的叙事」になる。「趣味的記事」は自然・人事に関する古典趣味の表現と言えるが、閑寂な景物、簡素な生活、繊細な人情を好んで描いており、無常観を柱とした中世的美意識に貫かれている。「思想的論述」には、儒仏の思想と道義観から老荘的な虚無思想までが見られるが、その根底には人生無常の冷徹な認識と求道の精神とが流れている。「説話的叙事」は、世間に伝えられている珍談奇談、芸能・武芸に関する逸話、特定の人の言行などで、そこには兼好の人間に対する好奇心と理解の深さが感じられる。これらの章段が、ある場合は自然な連想によってつながり、ある場合には新しい話題に転じていくというように、非連続の連続とか連歌的とか評される配列で並んでいる。文体も、この多様な内容に対応しており、「趣味的記事」では、主として流麗典雅な擬古的な和文であり、「思想的論述」では、雄健な和漢混交文で、「方丈記」「東関紀行（とうかんきこう）」の文体を推し進めた説得力ある論説文となっている。また、「説話的叙事」では、平明な文章が用いられている。「徒然草」は、「枕草子」「方丈記」と並び、三大随筆の一つとされ、思索的な古典作品の代表と言ってもよい。平安王朝への憧れを抱いていた作者は、平安時代の「枕草子」に強い影響を受けたようであるが、この「徒然草」自身もまた、後世に強い影響を与えたのである。

参考文献

❊教師用

▽注釈書

日本古典文学大系「方丈記・徒然草」西尾実　岩波書店　昭三十三
新日本古典文学大系「方丈記・徒然草」久保田淳　岩波書店　平元
日本古典文学全集「方丈記・徒然草他」永積安明　小学館　昭四十六
新潮日本古典集成「徒然草」木藤才蔵　新潮社　昭五十二
校注古典叢書「徒然草」市古貞次　明治書院　昭四十四
「徒然草全注釈」安良岡康作　角川書店　昭四十二・四十三
「徒然草全訳注」三木紀人　講談社　昭五十四～五十七
「増補徒然草解釈大成」三谷栄一他　有精堂　昭六十一

▽研究書

「徒然草総索引」時枝誠記　至文堂　昭三十
「枕草子・徒然草」（国語国文学研究史大成）斎藤清衛他　三省堂　昭三十五
「方丈記・徒然草」（日本文学研究資料叢書）有精堂　昭四十六
「徒然草研究序説」桑原博史　明治書院　昭五十一
「徒然草諸注集成」田辺爵　右文書院　昭五十四

▽入門書・鑑賞、その他

鑑賞日本古典文学「方丈記・徒然草」富倉徳次郎　角川書店　昭五十

研究資料日本古典文学「随筆文学」大曾根章介・久保田淳他
明治書院　昭五十八
新潮古典アルバム「方丈記・徒然草」稲田利徳　新潮社　平二
「徒然草講座」
有精堂　昭四十九〜五十二
「兼好の人と思想」中川徳之助　古川書房　昭五十
「古典鑑賞徒然草の世界」安良岡康作　教育出版　昭五十八
「卜部兼好」冨倉徳次郎　吉川弘文館　昭六十二
「カラー版徒然草」桑原博史　桜楓社　昭六十二
「徒然草必携」久保田淳　学燈社　昭六十二
「新版　徒然草」（角川ソフィア文庫）小川剛生　平成二十七
「兼好法師　徒然草に記されなかった真実」小川剛生
中央公論新社　平成二十九

❊**生徒用**

「徒然草」（角川ソフィア文庫　ビギナーズ・クラシックス）
角川学芸出版　平十四
「使える！『徒然草』」（ＰＨＰ新書）齋藤孝
ＰＨＰ研究所　平十七
「Essays in Idleness」ドナルド・キーン訳
チャールズ・イ・タトル出版　平成十八年
「図説「無常」の世を生きぬく古典の知恵！方丈記と徒然草」
三木紀人監修　青春出版社　平二十三
「絵本徒然草」（河出文庫）橋本治　河出書房新社　平十九
「徒然草をどう読むか」（放送大学叢書）島内裕子
左右社　平二十一

図版解説

〈奈良絵本『徒然草』〉

名古屋市蓬左文庫蔵。江戸時代前期（一七世紀）。絵本。六冊。「奈良絵」とよばれる極彩色の挿絵をともなう豪華な絵本で、婚礼調度として用いられる例が多かった。本書は、現存する奈良絵本の「徒然草」では、最も多くの挿絵を収録している。⇩P29・35・37

〈石山寺縁起〉

国立国会図書館蔵。石山寺建立の由来、本尊の観世音菩薩の霊験を描いた絵巻物。七巻。原本は鎌倉末期に絵師の高階隆兼（生没年未詳）が作ったと言われるが散佚し、後世補修したため巻により筆者が異なる。⇩P30

〈徒然草絵巻〉

サントリー美術館蔵。江戸時代前期（一七世紀）。二十巻。『徒然草』全文とそれに対応する二百四十八図の絵で構成される。海北友雪（一五九八〜一六七）筆。海北友松の長子。⇩P33

〈嵯峨本『徒然草』〉

国立国会図書館蔵。江戸時代初期。古活字版。嵯峨本とは、慶長十三年（一六〇八）から元和年間（一六一五〜二四）にかけ、角倉素庵と本阿弥光悦が印行した、木活字による書籍の総称。素庵が京都洛西嵯峨に住んだのでこの名がある。⇩P39

亀山殿の御池に

（第五十一段）

要旨

亀山殿の池に水を引こうとして、土地の住民に水車を作らせたところ、全く動かなかった。それで宇治川のそばの住民を呼んで、作らせたところ、うまく回ってみごとに水を引くことができた。専門家というのはたいしたものだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P三〇・6〈立てりけり。〉	亀山殿の池に大井川の水を引こうとして、土地の住民に言いつけて、水車を作らせた。多くの費用と時間を使って作ったが、全く回らず、いろいろ直しても、結局回らないで、役に立たなかった。
第二	P三〇・7〈さて〉〜P三〇・9〈めでたかりけり。〉	そこで、宇治川のそばの住民を呼んで、作らせたところ、簡単に作って、思うように回って、水をくみ入れることができて、みごとであった。
第三	P三〇・10〈よろづに〉〜終わり	何事でも、専門家は、すばらしいものである。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①亀山殿（かめやまどの）の　御池（みいけ）に　大井川（おほゐがは）の　水（みづ）を　まかせ
格助・体修　格助・場所　格助・体修　格助・対象　サ下二・未

られ　ん　と　て、　大井（おほゐ）の　土民（どみん）に　仰（おほ）せ
尊・未　語り手→上皇　意・終　格助・引用　格助・体修　格助・対象　サ下二・用（尊）語り手→上皇

て、　水車（みづぐるま）を　作（つく）ら　せ　られ　けり。　②多（おほ）く　の　銭（あし）を　給（たま）ひ
接助・単接　格助・対象　ラ四・未　使・未　尊・用　語り手→上皇　過・終　形ク・用　格助・体修　接助・単接

て、　数日（すじつ）に　て　営（いとな）み出（いだ）し　て、　掛（か）け　たり　ける　に、　おほかた　めぐら　ざり　けれ　ば、　とかく　直（なほ）し
格助・対象　八四・用（尊）語り手→上皇　接助・単接　格助・時間　サ四・用　接助・単接　カ下二・用　完・用　過・体　接助・単接　ラ四・未　打・用　過・已　接助・順理　副　サ四・用

たり　ける　に、　おほかた　めぐら　ざり　けれ　ば、　とかく　直（なほ）し
完・用　過・体　接助・単接　ラ四・未　打・用　過・已　接助・順理　副　サ四・用

けれ　ども、　つひに　回（まは）ら　で、　いたづらに　立（た）て　り　けり。
過・已　接助・逆確　副　ラ四・未　接助・打消　形動ナリ・用　タ四・已　存・用　過・終

③さて、　宇治（うぢ）の　里人（さとびと）を　召（め）し　て、　こしらへ
接　格助・体修　格助・対象　サ四・用（尊）語り手→上皇　接助・単接　八下二・未

させ　られ　けれ　ば、　やすらかに　結（ゆ）ひ　て　参（まゐ）らせ
使・未　尊・用　語り手→上皇　過・已　接助・順偶　形動ナリ・用　八四・用　接助・単接　サ下二・用（謙）語り手→上皇

たり　ける　が、　思（おも）ふ　やうに　めぐり　て、　水（みづ）を　くみ入（い）るる　こ
完・用　過・体　格助・主格　八四・体　比・用　ラ四・用　接助・単接　格助・対象　ラ下二・体

と　めでたかり　けり。
形ク・用　過・終

④よろづに、　その　道（みち）を　知（し）れ　る　者（もの）は、　やんごとなき
副　代　格助・体修　格助・対象　ラ四・已　存・体　係助・区別　形ク・体

①亀山殿のお池に、大井川の水をお引き入れになろうということで、大井の土地の住民にご命じになって、水車を作らせなさった。②多くの金銭をお与えになり、幾日もかかって作り上げて、（大井川に）掛けたところが、全然回らないので、あれこれ手直ししてみたけれども、結局、回らないで、（水車は）何の役にも立たないで立っていた。

③そこで、宇治川のそばの住民をお呼びになって、（水車を）作らせなさったところ、やすやすと組み立ててさし上げたものが、思うように回って、水をくみ入れることは見事であった。

④何事につけても、その道の専門家は、大したものである。

ものなり。
断・終

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶『徒然草』や作者兼好についての知識を発表する。[知技(1)ア・(2)イ]

❶三大随筆の作品名と作者を確認する。

「枕草子」清少納言　「方丈記」鴨長明　「徒然草」兼好

兼好については、出家遁世していることを出家遁世の意味も含めて、押さえる。著名な歌人であったこともでてきたら、確認しておく。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。[知技(1)ウ・(2)ウエ]　→**「言葉と表現」1**

❷二つの場面と作者の考察について、内容をまとめて理解する。[知技(1)エ][思判表B(1)ア]　→**「学習のポイント」1**

❸「その道を知れる者」とはどのような人のことを言うのか、話し合う。[思判表B(1)イウ]　→**「学習のポイント」2**

❹「その道を知れる者」にふさわしい人を、身近にいる人の中から選び、どのような点で「道を知れる」と言えるのか、発表させる。[思判表B(1)オ][主態]　→**「言語活動」1**

❶用言、特に形容詞、形容動詞をチェックし、その意味を文脈に応じて正確に理解する。「いたづらなり」「やすらかなり」「めでたし」「やんごとなし」などの理解がポイントとなる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❷二つの場面は次のようになる。

「大井の土民」の場面（P三〇・2〜6）をまとめさせる。

亀山殿の池に水をくみ入れるための水車を土地の住民に作らせた。たくさんの費用と日数をかけて作ったが、うまく回らず、あれこれ直しても回らなかった。

「宇治の里人」の場面（P三〇・7〜11）をまとめさせる。

宇治川のそばの住民に作らせたところ、簡単に作って、しかも思うように回って、水をくみ入れることができた。

「数日に営み出して」に対して「やすらかに結ひて」

「おほかためぐらざれば」に対して「思ふやうにめぐりて」

このような対比を板書して、確認させると分かりやすい。次に作者の考察を考える。「やんごとなき」（P三〇・1）の意味を捉え、作者が宇治の里人の技に賛辞を与えていることを理解させる。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、「大井」の人と「宇治」の人との違いをノートに表形式でまとめさせ、対応する項目がきちんと整理されているか、確認する。

❸ひとりひとりの名人のイメージをまとめ、話し合う。人によっては、だれにもできないことをするのが名人だと考えるかもしれないし、だれにでもできそうなことでもより容易にするのが名人だと考るかもしれない。いろいろな意見をぶつけることで、名人についての考えを深められるとよい。また、そのようなことから、あるものごとについてよく知っていることが大切だということも理解できる。なにごとにもちょっとした「こつ」のようなものがあり、それを知っているか、そうでないかが、ものごとがうまくいくかどうかを大きく左右するものである。専門家がやると簡単にできることが、そうではない人にとってはどうやってもうまくいかない。そのあたりの事情がうまく書き込まれている段であるので、読み味わいたい。最終的には社会で働くことの意義にまで考えが及ぶとなおよいだろう。

【評価】「道を知れる人」について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、最後の部分を適切に現代語訳し、十分に理解しているか、自分の言葉で言い換えさせたり、他の例を挙げさせたりして、確認する。

・文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、対照的な二組の人々を登場させていることについて、発言を求め、自分の言葉で説明できるか、確認する。

❹スポーツ選手や何かの作品（文章でも映像でも）の登場人物でもよい。❸で考えたことに当てはまる人を幅広く考えてみる。

【評価】作者が名人の技術をどのように評価しているかについて、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、各自の意見を発表させて確認する。

・進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、作者の主張を読み取り、自分の身近にいる人から「その道を知れる者」を選んでその理由とともに発表しようとしているか、分析する。

指導上の注意点と発問例

●三〇ページ

問 (1)**「大井の土民に仰せて」（2行目）の「仰せ」の基本的な意味を述べよ。**
(2)**文法的に説明し、ここでの意味を書け。**

答 (1)①「おっしゃる」意で「言ふ」の尊敬語。「らる」「給ひ」を伴い「仰せらる」「仰せ給ふ」となって、敬意の高い語となる。②「お命じになる」意で、「命ず」の尊敬語。(2)サ行下二段活用の動詞「仰す」の連用形。「命ず」の尊敬語で「ご命令になる」「言い付けなさる」の意。

問 [易](1)**「銭を給ひ」（3行目）の「銭」とは何のことか。**
[中](2)**「給ひ」の用法、意味を答えよ。**

答 (1)お金（金銭、ぜに、あし）(2)（用法）ハ行四段活用の動詞「給ふ」の連用形。（意味）「与ふ」の尊敬語で「お与えになる」の意。

問 **「数日に営み出だして」（3行目）とは、①誰が、②どうしたというのか。**

答 ①大井の土地の者。②水車を造り上げた。

問 **「おほかた」（4行目）の意味用法を説明せよ。**

答 叙述（陳述）の副詞。下に否定語（打消語）を伴って「全然」「まるっきり」「いっこうに」「少しも」の意となり、ここでは「ざり」（助動詞・打消・連用）と呼応している。

問 **大井の土民はどのように水車を作り、出来上がったものはどのような様子であったか。**

答 ・何日もかけて作った。・全く回らなかった。

補 数日に営み出だして」「おほかためぐらざりければ」が該当部分である。

問 **「いたづらに」（5行目）を文法的に説明せよ。**

答 形容動詞「いたづらなり」（徒らなり）の連用形。

問 ◉**「いたづらに」（5行目）とは、どのような様子か。**

答 せっかく作った水車なのに、全く回らない役に立たない様子。期待はずれの失望感が含まれる言い方である。

補 回らなかった水車をあれこれ直したが、結局回らなかったという過程を踏まえ、この語に込められている気持ちにも考え至らせるとよい。

問 **なぜ「宇治の里人」が召されたのか。**

答 宇治川は昔から水車で有名であり、その土地の人なら水車がうまく作れると思われたから。

問 **「こしらへさせられければ」（7行目）と同**

語句の研究

●三〇ページ

2亀山殿　鎌倉時代の院の御所。嵯峨殿ともいう。建長七（一二五五）年に後嵯峨上皇の御所として造営され、子の亀山院や、孫の後宇多院も御所として用いている。現在の天竜寺の地（京都市右京区嵯峨）にあった。大堰川に南面し、西北に小倉山を望む。亀山とはこの山の東南端の丘の名である。

2大井川　大堰川。保津川が嵐山の麓を流れる間の名。その下流は桂川という。亀岡市方面から流れてくる保津川に清滝川が合流する所から嵐山の麓の渡月橋までの間を、「大井川」と呼ぶ。渡月橋より下流を桂川と言う。

2まかせられん　お引き入れになろう。「まかす」は池などに水を引く意。「られ」は尊敬の意。亀山殿の寝殿の前の池に大井川から水を引こうとしたのである。この敬語については後嵯峨上皇に対するものと考えられるが「古今著聞集」の亀山殿造営の項に、「大井の山荘を仙宮にうつしておはします。造営のことは、権大納言実雄卿の沙汰とぞ聞こえし。」とあり、御所造営の責

じ内容の語句を、「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。

答　水車を作らせられけり

問　[易](1)**「参らせたりけるが」（8行目）とは、誰が、どうしたのか。**
[中](2)**同じ内容の語句を「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。**

答　(1)宇治の里人が、水車を組み立てて差し上げた。(2)掛けたりける。

問　**大井の土民の作った水車に対して、宇治の里人の作った水車はどのような様子であったか。**

答　・やすやすと作った。・期待どおりに回った。

補　「思ふやうに」には、「いたづらに」に対して、期待どおりというニュアンスが含まれる。

問　(1)**「水をくみ入るることめでたかりけり」（9行目）の「めでたし」とは、どのような意味か。**
(2)**対応する語句を、「大井の土民」についての叙述から抜き出せ。**

答　(1)見事である。すばらしい。(2)つひに回らで、いたづらに立てりけり

問　**「めでたかりける。」に込められた気持ちを考えよ。**

答　見事なものだという賞賛する気持ち。

補　「めでたし」は「めづ」（ほめる）と「いたし」（甚だしい）の複合した形と言われている。そこから、この語に込められた気持ちを考える。

問　**次の部分の主語を後の語句から選べ。**
(1)多くの銭を給ひて
(2)数日に営み出だして、掛けたりけるに
(3)おほかためぐらざりければ
(4)とかく直しけれども
(5)つひに回らで、いたづらに立てりけり
ア　水車造りを命じた人　イ　大井の土民　ウ　水車

答　(1)ア　(2)イ　(3)ウ　(4)イ　(5)ウ

補　本文の文脈は、主語が次々と変わっているので、正確に読み取る必要がある。

問　**この段の主題を述べている分を抜き出せ。**

答　よろづに、その道を知れる者は、やんごとなきものなり。

任者だった権大納言高階実雄に対するものという説もある。

2土民　土地の住民。亀山殿に近い大井川沿いに住んでいた人々。

2仰せて　「仰す」は、ここでは、「言いつける、命じる」の意。

2水車　ここでは水流で回転し揚水する水車のこと。平安時代前期より灌漑のために用いられた。

3銭を給ひて　足のあるごとく世間に流通することから、貨幣の異名を「あし」と言った。「給ふ」は「与ふ、授く」の尊敬語。このままだと、主語は後嵯峨上皇と考えられ、次の部分から主語が変わるが、「給はりて」と混用されているとの説もあり、そうすると「給はる」は「受く」「もらふ」の謙譲語なのでこの一文は主語が大井の土民で統一されている。

3数日　「すじつ」と読む。現代の数日よりもやや長い日数を指す。「何日も」の意。

3掛けたりけるに　「掛く」は「仕掛ける、取り付ける」の意。水車を大井川に取り付けたのである。

4おほかた　下に打ち消しの表現を伴って「全然」「少しも」の意味を表す。中世に始

まった語法と言われ、中古では「一般に、おおよそ」の意であるので、注意する。

4めぐらざりければ　「めぐる」は「回転する」の意の自動詞で、ここからこの水車が川の流れによる自転式のものであったと考えられている。水車は古くは人力や牛馬の力による他動式のもので、自転式の水車は当時、新技術であったとされる。そうすると、この話は分かりやすい。

5回らで　回らないで。「で」は活用語の未然形に付く接続助詞で、「…ないで」と打消接続の意で用いられる。

5いたづらに　「いたづらなり」はもともと努力に見合った結果が得られない、期待はずれの様子を表す語で、ここは本来の意味で使われている。子供の悪ふざけを指すようになるのは、中世以後の用法である。

7宇治　宇治川沿いの地。現在の京都府宇治市付近。宇治川は昔から水車で有名であった。この付近の宇治川は急流で、それを利用して数多くの水車が作られた。また「宇治の川瀬の水車」は風物詩として「梁塵秘抄」などでうたわれるなど、水車の名所でもあった。「宇治の里人」は、宇治の里の住人のことで、急流に臨み水車の技術に秀でた者たちとして、先の「大井の土民」と対照的に描かれている。

8結ひて　組み立てて。前文の「こしらふ」は「工夫して作る」意である。

8参らせたりけるが　「参らす」は「差し上げる、献上する」の意の謙譲語。「が」は下の「めぐりて」「くみ入るる」の主格を示す。「差し上げた（水車）が」ということ。

10その道　その専門。「道」は、ここでは、「技芸や技術の奥義、こつ」というようなもの。その人だけの専門分野ということである。

10やんごとなきもの　放っておけないくらい大切なものということで、第一級のもの、最高のものに用いる語である。重大である。はなはだ尊い。なみなみではない。

鑑賞

いわゆる名人談の一つである。ただし、この段は、名人とは言えない「大井の土民」と名人である「宇治の里人」とを対照的に描いているので、他の名人談よりも名人とはどのようなものかが考えやすくなっている。そもそも「大井の土民」という言い方と「宇治の里人」という言い方とには微妙な差があるように感じる。「土民」という言い方がおとしめた表現であるかどうかは定かではないし、当時の表現と現在の感じ方の間には異なる面もあるだろうが、「土民」よりも「里人」という言い方のほうが、穏当な感じがすることは否めないだろう。しかし、それは技術に対する賞賛とも言うべきもので、決してその人たちそのものに向けられるものではないであろう。そのような作者の関心の在り方については慎重に読み取らせたい。

さて、この章段では、まず初めに、「大井の土民」の水車作りについて述べられる。費用も日数も多くかかったのに、全く回らない。その上、あれこれ直してもかいがない。最終的にその水車は「いたづらに」立っていたというのである。この「いたづら」という語がある意味で辛辣である。「役立たず」というのである。それに対して、「宇治の里人」はやすやすと作って、考えたとおりに回ったと言う。対応する部分を板書しながら、その違いをしっかりと把握させたい。どこがどのようにうまくいかなかったのか、どのような違いがあるのかなどということはいっさい書かれない。おそらく「名人、専門家」というものに対する作者の一般的な解説の意味合いも強いのであろう。ふつうの人には説明しても分かりづらいものの、ちょっとした「こつ」が物事をスムースに運ぶことを象徴的に語ろうとしているのではないだろうか。「宇治の里人」の水車に対する「めでたかりけり」という評価や専門家に対する「やんごとなきものなり」という評価はそのちょっとした「こつ」への最大級の賛辞となっている。作者自身もこのようなちょっとした「こつ」へのこだわりを持っていたのであろう。すごいことではない、教えてもらえれば何だというくらいのことかもしれないが、それを知ることはたいへんなことなのである。「徒然草」の他の名人談を読んでも、なんとなくそのような作者の思いが読み取れるような気がする。

この水車の技術については、従来、水車は人力や牛馬の力による他動式であったのが、このころ、自動式のものが生まれ、その新技術がポイントになっているという説がある。なるほどそのような説明を加えると納得がいくが、先にも述べたように、具体的な事実のみが問題とされているわけではないのであろう。そのような具体的な事実がなくとも、ちょっとしたことで水車は回ったり、回らなかったりすることについては、似たような経験を含めればだれしも経験していることなのである。それを思い起こしつつ、物事をスムースに運ばせる「こつ」の意義について考えさせればよいのではないだろうか。そして、まだ一年生ではあるが、社会に出たあとで、どのようなことが大切にされるのか、意識付けができれば、それにこしたことはないであろう。

《板書例》　水車作りの違い

大井の土民　「多くの銭」「数日に」　「めぐらざり」　「つひに回らで」　いたづらに

→　→

←　←

宇治の里人　「やすらかに」　「思ふやうにめぐりて」　「水をくみ入るる」　めでたかり

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「大井の土民」の「数日に営み出だして」（三〇ページ２行～３行）と「おほかためぐらざりければ」（三〇ページ４行）に対応する「宇治の里人」の様子を抜き出して、「大井の土民」と「宇治の里人」の間にはどのような違いがあったのか、考えてみよう。**

【答】「数日に営み出だして」→「やすらかに結ひて」
「おほかためぐらざりければ」→「思ふやうにめぐりて」
大井の土民は水車を造ることに精通してはおらず、一方、宇治の里人は水車造りを得意としていた。

▼ポイント▲　「数日に」と「やすらかに」、「めぐらざりければ」と「思ふやうにめぐりて」がそれぞれ対応していると考えられる。対応関係は現代語訳ができていれば考えられる。大井の土民と宇治の里人との違いは脚注を参考にしながら、考えるとよい。

2 **「その道を知れる者」（三〇ページ10行）とはどのような人のことを言うのか、話し合ってみよう。**

【答】あることがらについての、ちょっとした「こつ」や秘訣を知っている専門家のこと。

▼ポイント▲　ちょっとした「こつ」や秘訣は実は案外と分かりにくいもので、何かをきわめてよく理解している人だからこそ説明できることが多いのである。

言葉と表現の解答例

1 **次の文を単語に分け、用言を抜き出して、それぞれ終止形に直してみよう。**
(1)　いたづらに立てりけり。（三〇・５～６）
(2)　やんごとなきものなり。（三〇・10）

【答】(1)　いたづらに／立て／り／けり　「いたづらなり」（形容動詞）「立つ」（動詞）
(2)　やんごとなき／もの／なり　「やんごとなし」（形容詞）

言語活動の解答例

1 **「その道を知れる者」にふさわしい人を、身近にいる人の中から選び、どのような点で「道を知れる」と言えるのか、発表してみよう。**

（意図）「その道を知れる人」がどのような人か、自分に引き付けて考える。自分の思い描く人について詳しく説明する。

（手順）

1「その道を知れる人」としてふさわしい人を選び出す。

思い浮かぶ人を列挙する。スポーツ選手や歌手など思い浮かぶ人はたくさん挙げられるだろう。その人たちの中から、その人が話したことや書いたことで、「コツ」らしきものがあったと思い浮かぶ人を選ぶとよい。

2「その道を知れる人」としてふさわしい理由を考える。

「コツ」らしきものをポイントにふつうはなかなか気付かないことに気付かせてくれた経験をまとめるとよい。すごいことを挙げようと考え過ぎなくてよい。ちょっとしたことでもいいので、気になることを挙げてみる。そのようなことをまとめると意外に多くの人の共感を得ることができる。

（ゴール）多くの人に自分の考える「その道を知れる人」を知ってもらい、興味を持ってもらうことがいちばん大切なことである。いわゆる「名人」は実は身近にもいることに気付くと、学びの世界が広がる。また、そのために堂々と自分の思いを伝えるように工夫してみよう。

（畠山　俊）

大事を思ひ立たん人は

（第五十九段）

要旨

出家入道を思い立つ者は、一切の世事を捨てて、すぐに実行しなければ、事を成し遂げられない。死はすぐにでも、我々の上にやってくるのだから、捨てにくいものでも捨ててしまわなければならない。

構成

段落	ページ・行	段意
第一段	初め～P三二・8〈過ぐめる。〉	出家入道を思い立つ者は、気にかかる一切の世事をすっかり捨てなければならない。あれこれ気にしていると、それらが尽きず、出家できなくなる。大体の人はこのような心積もりだけで一生を終わるようである。
第二段	P三二・9〈近き火などに〉～終わり	火事の際、なんでも捨て逃げるように、人の死もいつやってくるか分からないから、すべてを捨てるのがよい。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①大事（だいじ）を　思ひ立（おもひた）たん　人（ひと）は、　去（さ）りがたく、　心（こころ）に　かから
格助・対象　タ四・未　婉・体　係助・区別　形ク・用　格助・対象　ラ四・未

ん　ことの　本意（ほい）を　遂（と）げ　ず　して、　さながら　捨（す）つ　べき
婉・体　格助・体修　格助・対象　ガ下二・未　打・用　接助・単接　副　タ下二・終　適当・体

なり。　②しばし、　この　こと　果（は）て　て、　同（おな）じく　は　か
断・終　副　代　格助・体修　タ下二・用　接助・単接　形シク・用　係助・区別　代

の　こと　沙汰（さた）しおき　て、　しかしか　の　こと、　人（ひと）の
格助・体修　カ四・用（サ変・用＋補動）　接助・単接　副　格助・体修　格助・体修

嘲（あざけ）り　や　あら　ん、　行（ゆ）く末（すゑ）　難（なん）なく　したためまうけ　て、
ラ四・用　係助・疑問（係）　ラ変・未　推・体（結）　形ク・用　カ下二・用　接助・単接

年（とし）ごろ　も　あれ　ば　こそ　あれ、　その　こと　待た
副　係助・強意　ラ変・已　接助・順理　係助・強意（係）　ラ変・已（結）　代　格助・体修　タ四・未

ん、　ほど　あら　じ、　もの騒（さわ）がしから　ぬ　やうに　など　思（おも）は　ん
意・用　ラ変・未　打推・用　形シク・未　打・体　比・用　副助・引用　八四・未　婉・体

に　は、　え　さら　ぬ　こと　のみ　いとど　重（かさ）なり　て、　こと
接助・単接　係助・区別　副　ラ四・未　打・体　副助・限定　副　ラ四・用　接助・単接

の　尽（つ）くる　限（かぎ）り　も　なく、　思（おも）ひ立つ　日（ひ）も　ある　べから　ず。
格助・主格　カ下二・体　係助・並列　形ク・用　タ四・体　係助・並列　ラ変・体　当・未　打・終

③おほやう、　人（ひと）を　見（み）る　に、　少（すこ）し　心（こころ）ある　きは　は、　みな
副　格助・対象　マ上一・体　接助・単接　副　ラ変・体　係助・提示　副

この　あらまし　にて　ぞ　一期（いちご）は　過（す）ぐ　める。
代　格助・体修　格助・状態　係助・強意（係）　係助・強意　ガ上二・終　婉・体（結）

①仏道に入り、悟りを開くことを決心するような人は、心から離れず、気にかかることの、かねてからの望みを成し遂げることをしないで、そっくりそのまま捨て去るべきである。②しばらく（待って）、このことが終わって（からにしよう）、同じことなら、あのことを処理して（からにしよう）、これこれのことについては、他人が嘲笑するだろう、将来、非難のないよう前もって処置しておいて（からにしよう）、長年の間こうして何事もなく過ごしてきたのだから、そのこと（の終わるの）を待とう、長くはかかるまい、あわて騒がないようにして（からにしよう）などと思うようでは、避けられないことばかりがますます重なって、それらの用事がなくなる際限もなく、（出家を）決心する日もあるはずがない。③大体において、（世の中の）人を見ると、少しだけの（出家・入道の）志ある人々は、みんなこのような心積もりだけで一生が過ぎてしまうようである。

④近き　火　など　に　逃ぐる　人　は、「しばし。」と　や
形ク・体　副助・例示　格助・理由　ガ下二・体　係助・提示　副　格助・引用　係助・疑問(係)

言ふ。　⑤身　を　助け　ん　と　すれ　ば、　恥　を　も
ハ四・体(結)　格助・対象　カ下二・未　意・終　格助・引用　サ変・已　接助・順恒　格助・対象　係助・並列

顧み　ず、　財　を　も　捨て　て　逃れ去る　ぞ　かし。
マ上二・未　打・用　格助・対象　係助・並列　タ下二・用　接助・単接　ラ四・終　係助・強意　終助・念押

⑥命　は　人　を　待つ　もの　かは。　⑦無常　の　来る　こと
係助・提示　格助・対象　タ四・体　係助・反語　格助・主格　ラ四・体

は、　水　火　の　攻むる　より　も　速やかに、　逃れがたき
係助・提示　格助・主格　マ下二・体　格助・比基　係助・強意　形動ナリ・用　形ク・体

ものを、　その　とき、　老い　たる　親、　いときなき　子、　君　の
接助・逆確　代　格助・体修　ヤ上二・用　完・体　形ク・体　格助・体修

恩、　人　の　情け、　捨てがたし　とて　捨て　ざら　ん　や。
格助・体修　形ク・終　格助・引用　タ下二・未　打・未　推・終　係助・反語

④近所の火事などで逃げる人は、「しばらく（待ってから逃げよう）。」と言うだろうか（いや、言わない）。⑤自分の身を助けようとすれば、恥をも顧みないで、財宝をも投げ捨て逃げ去ることになる。⑥（人の）命は人（の気持ち）を待ってくれるだろうか（いや、待ってはくれない）。⑦死のやってくることは、水や火の災難が襲いかかるよりも速くて、逃げ去ることはできないものなのに、そのときになって、年老いている親、幼い子供、主君から受けた恩、他人の好意などを、捨てにくいといって捨てないだろうか（いや、捨てるに違いない）。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶「大事を思ひ立つ」ことを妨げるものを整理させ、まとめさせる。知技(1)ウ・(2)イウ 思判表B(1)ア →「学習のポイント」1

❷「少し心あるきは」とは、どのような人か、話し合わせる。知技(1)エ 思判表B(1)ウ →「学習のポイント」2

❸本文中の近所の火事の例の表現上の効果について考えさせる。知技(1)ア・(2)エ 思判表B(1)イ →「言葉と表現」1

❹「少し心あるきは」はなぜ「みなこのあらましにぞ一期は過ぐめる」のか、考えさせる。思判表B(1)オ 主態 →「言語活動」1

展開

❶第一段落の現代語訳をもとにして、妨げるものをまとめる。同じようなことを言い換えている場合もあるので、そのようなものはまとめて、二点に絞らせる。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストで確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、各自に現代語訳をさせることによって、各部分のつながりを意識し、なめらかな現代語訳になっているか、確認する。

❷「大事を思ひ立たん人」と対照されていることに留意させる。「少し」という語の意味をきちんと捉え、志が弱い人であることに気付かせる。何人かの意見の交換の中でまとめられるとよい。

【評価】文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・「少し心あるきは」について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、意見交換によって確認する。

❸第二段落の現代語訳を参考にし、火事の例がどのようなことを示そうとしているかを考え、効果について考える。第二段落にあげられている例が作者の主張に果たしている役割を考えさせ、作者の論理を支えていることに留意させる。その際に火事の例のどの部分が最後の一文のどの部分と対応しているのかを整理するとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。
・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。
・どのような論理構造になっているかについて、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を理解できているか、ノートにまとめさせて、確認する。
❹❷で考えた「少し心あるきは」がどのように行動するかを想像して、「このあらまし」の内容と合わせることによって「一期は過ぐめる」理由を考えて行く。作者の主張を支持するか、支持しないかを考えさせ、二つのグループに分かれて討論させる。その際に、「大事を思ひ立たん人」と「少し心あるきは」との違いを意識して作者の主張を理解するように心がける。

【評価】作者の主張について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、グループ討論によって確認する。
・進んで『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え学習課題に沿って、作者の主張がもっとも表れている一文を読み取ろうとしているか、グループ討論をさせ、相手の主張を正しく受け取っているか、論理的に反論しているかを分析する。

指導上の注意点と発問例

●二二ページ

問 **[易]「大事」（2行目）とは、ここではどういうことを意味しているか。**

答 仏道に入り、悟りを開くこと。

問 **[難]「大事」とは、仏教で言う「一大事」であるが、具体的にはどういう意味の言葉か。**

答 仏がこの世に出現する目的である一切衆生を救済すること。

問 **「さながら」（3行目）のここでの意味は次のうちのどれか。**

アそっくりそのまま　イすっかり　ウあたかも　エ全然

答 ア

問 **「大事を思ひ立たん人は、…捨つべきなり。」（2行目）と主張する根拠または理由と見られる部分を書き抜け。**

答 命は人を待つものかは。無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを（10行目）

問 **「沙汰」（3行目）の意味を、次の中から選べ。**

ア議論して決めること。判定。イ相談すること。評議。ウ命令すること。指図。エ処理すること。始末。

答 エ

語句の研究

●二二ページ

2大事　人の一生のもっとも大事なこと。ここでは、仏道に入り、悟りを開くこと。それまでの世俗の生活を捨てるということであり、まさしく人生の一大事である。

2思ひ立たん人　「思ひ立つ」は「決心する」「発心する」意。決心したことを実行する過程も含めて言う語。

2去りがたく　「去る」は自動詞で、「去りがたく」は「（心から）離れず」の意。下の「心にかからんこと」を限定する語である。

3さながら　「然ながら」の意。そのまま手をつけないで、ということ。

3しばし、このこと果てて　「しばし」は「しばらく待とう」の意。「果てて」の後には「出家しよう」などの語句を補って読むとよい。「沙汰しおきて」「したためまうけて」「もの騒がしからぬやうに」の後にも、同様に補うことができる。

3同じくは　「同じく」は形容詞の連用形、「は」係助詞。「同じことなら」「どうせ…するなら」という意で副詞的に用いられる。

3沙汰しおきて　「沙汰す」は「処置する、始末をつける」の意。補助動詞「おく」が付いて、「処置しておいてから」の意になる。

4したためまうけて　「したたむ」は「処置する・整理する」の意で、「まうく」は「前もって準備する」の意の複合動詞。上の「行く末難なく」を受けて、「非難されることの無いように準備する」のである。

5年ごろもあればこそあれ　「長年の間こうして何事もなく過ごしてきたのだから」の意か。この箇所には幾つかの解釈がなされている。教科書の脚注のような考え方の他に、「長い年月がかかるのでは困るが」「長年、このようにやってきたのに」と解釈する説などがある。

5ほどあらじ　「ほど」は時間の長さの程度を表す。「あらじ」の「あり」は「経過する」「すぎる」の意。

5もの騒がしからぬやうに　「もの騒がし」は、ここでは、「せっかちだ」「気が早い」「あわただしい」の意。

6えさらぬ　「え…打消」は副詞の呼応である。「さらぬ」を、ここでは、「避る」と解したが、「去りがたく」の「去り」と同様に解して、「我が身から離れない」とする

問　**次の「や」を文法上から説明せよ。**
(1)人の嘲りやあらん（4行目）
(2)「しばし。」とや言ふ。（9行目）
(3)捨てがたしとて捨てざらんや。（12行目）

答　(1)疑問の係助詞。(2)反語の係助詞。(3)反語の係助詞。

問　◉**「…など思はんには」（6行目）とあるが、思うことの具体的な内容を抜き出せ。**

答　「しばし、このこと果てて」（3行目）、「同じくはかのこと沙汰しおきて」（3行目）、「しかしかのこと、…行く末難なくしたためまうけて」（4行目）、「年ごろも…もの騒がしからぬやうに」（5行目）。

問　**次の部分の下に補うべき共通した言葉を示せ。**
(1)「しばし、このこと果てて」（3行目）
(2)「沙汰しおきて」（3～4行目）(3)「したためまうけて」（4行目）(4)「もの騒がしからぬやうに」（5～6行目）

答　「大事を思ひ立たん」（2行目）

問　**「えさらぬ」（6行目）について、**
(1)文法的に説明せよ。
(2)分かりやすく言い換えよ。

答　(1)→品詞分解参照。(2)避けることのできない。

問　**「人を見るに」（7行目）の「に」の働きは、どのようなものか。**

答　単純な接続を示し、後に述べる事柄が起こる状況を示している。

補　接続助詞の「に」であるが、単純な接続のほかに、原因・理由を示す順接の働きや逆説の働きなども示す。この場合は「…と」「たら」と現代語訳する。

問　**「少し心あるきは」（7行目）とは、どのような人か。**

答　少し道理の分かるような人。少し出家の志のある人。

問　**「無常」（10行目）の「常」とは、どういう意味を持つ語か。**

答　永久不変の意。

問　◉**「無常」は、ここでは、どのような意味か。**

答　「死」を意味する。

補　「無常」は物事が絶えず移り変わっていく意の仏教語であるが、それを人生のこととし、「死」を表すことがある。ここはその用法。直前の「命は人を待つものかは。」が参考になる。

考え方もある。

6ことの尽くる限り　「こと」は「心にかからんこと」「かのこと」「しかしかのこと」「そのこと」などとある、さまざまな用事のことである。

7思ひ立つ日大事　（出家）を「思ひ立つ日」の意。

7少し心あるきは　「心」は出家しようとする心である「きは」は「際」でその程度の人の意。強い決意ではなく。少しの軽い気持ちから出家しようと思っている人々のことを指している。

8このあらまし　「あらまし」は心に予測すること、将来の心あてのこと。「このあらまし」とは、すべての用事を済ませたうえで、出家しようと思う心の在り方（心積もり）を言う。

8一期　一生、生涯。人間のこの世に存在する間

9近き火などに　「近き火」は自分の家の近くの火事。「に」は原因を示す。

9しばし　三二ページ・3の「しばし」と同じ。下に「待たん」などを補って考える。

10命は人を待つものかは　人の命が尽きる時に、しばらく待ってくれという人の気持ち

を聞き入れて、待ってくれるだろうか、いや、待ってはくれない。「かは」は反語。

10 無常　ここでは死の意。

10 捨てがたしとて捨てざらんや　捨てにくいといって捨てないだろうか（いや捨てる）。「や」は反語の助詞。

キー・ポイント　中世の文学思想を代表するのが無常観といわれる。戦乱の中での命のはかなさ、人生のむなしさを実感した人々が、仏教からの影響もあり、無常を文学のテーマにするようになった。本来、万物流転の様相を表す語だが、より直接的に人の生死としての文学の中でとらえられることも多くなっていった。「徒然草」にも第四十一段をはじめ、無常観の扱われている章段が少なくない。

鑑賞

様々な内容を含む「徒然草」の中で、兼好の思想の核を形成する、無常迅速という認識を根底に据えた、道念についての論である。これに類する章段としては、他に「老来りて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ」（第四十九段）、「寸陰惜しむ人なし」（第百八段）、「明日は遠き国へ赴くべしと聞かん人に、心閑かになすべからんわざをば、人言ひかけてんや」（第百十二段）、「ある者、子を法師になして」（第百八十八段）などがある。これらのうち、第百八段・第百十二段・第百八十八段などは、例話や比喩をまず語っておいて、それから本論を展開するという形式をとっているのに対して、本段や第四十九段は、冒頭から主張を前面に押し出し、その後に例話や比喩を述べて、主張の支えとするという形式をとっている。議論の進め方、論説文の書き方としては、当然この両様が考えられるわけで、これら主題を同じくする他の章段と読み比べて、それぞれの表現効果を考えてみることもおもしろいであろう。最初に例話や比喩を語って、次第に本論に進むやり方は、説得力の大きい議論の進め方であるが、最初から言わんとすることを断定的に言ってしまうスタイルは、聴衆や読者に衝撃を与え、その気持ちを一気に話し手又は書き手に集中させ、更に共感へと呼び込むという効果を持っていると考える。

本段での、「近き火などに逃ぐる人は、『しばし。』とや言ふ。」という、火事の比喩は、無常迅速の理を説く上で極めて分かりやすく、効果的なものである。そして恐らく、「法華経」譬喩品第三に説く火宅の譬（三車一車）とも無関係ではないと思われる。

《板書例》　火事の例の効果

近い　火事　財産を捨てて逃げる　命が助かる

速やか

逃れがたい　死　すべて捨て出家する　極楽往生できる

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1　**「大事を思ひ立たん人」にとって、支障となるものはどのようなものであるか、まとめてみよう。**

【答】身の回りにある世の中の雑事、肉親、周囲の人々。

▼ポイント▲　同じようなことが繰り返し述べられているが、思い切って大づかみにする。事柄と人事という観点で考えるとよい。

2　**「少し心あるきは」（三二ページ7行）とは、どのような人であるのか、話し合ってみよう。**

【答】出家・入道しようと、軽い気持ちで思っているような人。

▼ポイント▲　「すこし」というところがポイントとなる。主題は「大事を思ひ立つたん人」で、その中でも「少し心ある」ということだから、「軽く考えている」となる。出家・入道は俗世間といっさいの関わりを絶つことだから、本来はいい加減な覚悟ではできないことである。そこを意識して解答したい。

言葉と表現の解答例

1　**本文中の近所の火事の例は、表現上どのような効果を上げているか、考えてみよう。**

【答】近所の火事という具体的に想定しやすいものを置くことによって、作者の出家・入道する際の支障となるものの説明が分かりやすくなり、身近なこととしてとらえられる効果がある。

▼ポイント▲　小事を捨てて大事に付くべきことは頭の中では理解できても、実際にはなかなかできるものではない。そのことを十分理解している作者は近所の火事の例を出す。この例ならば、どのように行動するか誰にでも考えやすいからである。

言語活動の解答例

1　**「少し心あるきは」は、なぜ「みなこのあらましにてぞ一期は過ぐめる。」（三二・8）のか、考えてみよう。**

【答】出家に対してあまり強い志を持っているわけではないので、ちょっとしたことで決心がゆらいで、そちらを優先し、出家が後回しになる。つまり、出家しようという心積もりを持ち続けるだけで実際の出家に至らないで、一生が終わるから。

▼ポイント▲

（意図）「大事を思ひ立たん人」に対応している「少し心あるきは」を正確に理解することで、「大事を思ひ立たん人」についての理解を深める。

（手順）

１「少し心あるきは」がどのような人かを的確に説明する。

「少し」を適切な現代語に置き換える。「大事を思ひ立たん人」との対照が明らかになるように説明してみる。

２「みなこのあらましにてぞ一期は過ぐめる」の理由を考える。

まず、「このあらまし」とは何かを捉える。さらに、「一期は過ぐめる」から出家を志していながら、出家が実現していないことに留意する。

（ゴール）

問題になっていることの説明はできるであろう。それが出家のことであることも頭で理解することは難しくない。そのうえで、出家ではなく、たとえば予復習のような身近なことにもこれが当てはまることに気付かせ、自分のことを振り返ることができるとよい。

（畠山　俊）

奥山に猫またといふものありて

（第八十九段）

要旨

人間を食うという猫またの噂を聞いた法師が、猫またを恐れながら夜道を歩いていた。その法師に猫またが飛びついた。法師は慌てて小川に落ち入り、助けを求めた。近所の人たちに助けられ、はうようにして家に入った。実は、法師の飼い犬が主人を知って、飛びついたのであった。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P三五・3〈入りにけり。〉	奥山や、この辺りにも、人を食う猫またがいるという噂を連歌を仕事としている法師が聞いた。用心しなければと思っていた頃、夜更けにひとりで帰ったが、小川のほとりで猫またが寄ってきて、飛びついた。慌てて小川に落ち、連歌の賞品も水に浸かり、法師ははうようにして、家に入った。
第二	P三五・4〈飼ひける犬の〉〜終わり	飼っていた犬が、暗いのに飼い主の帰宅を知って、飛びついたということだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①「奥山（おくやま）　に　猫（ねこ）　また　と　いふ　もの　あり　て、　人（ひと）　を
格助・場所　格助・引用　八四・体　ラ変・用　接助・単接　格助・対象

食ら（く）ふ　なる。」　と　人（ひと）　の　言ひ（いひ）　ける　に、　「山（やま）　なら　ね
八四・終　伝・体　格助・引用　格助・主格　八四・用　過・体　接助・単接　断・未　打・已

ども、　これら　に　も、　猫（ねこ）　の　経上（へあ）がり　て、　猫また　に
接助・逆確　代　格助・場所　係助・同類　格助・主格　ラ四・用　接助・単接　格助・変化

なり　て、　人（ひと）　取る（とる）　こと　は　あ　なる　ものを。」　と
ラ四・用　接助・単接　ラ四・体　係助・提示　ラ変・体（撥音（無表記））　伝・体　終助・詠嘆　格助・引用

言ふ（いふ）　者（もの）　あり　ける　を、　何阿弥陀仏（なにあみだぶつ）　と　か　や、　連歌（れんが）　し
八四・体　ラ変・用　過・体　格助・対象　格助・引用　係助・疑問　間助・詠嘆　サ変・用

ける　法師（ほふし）　の、　行願寺（ぎやうぐわんじ）　の　ほとり　に　あり　ける　が　聞き（き）
過・体　格助・同格　格助・体修　格助・場所　ラ変・用　過・体　格助・主格　カ四・用

て、　ひとり　ありかん　身　は、　心す（こころす）　べき　こと　に　こそ　と
接助・単接　副　カ四・未　婉・体　係助・提示　サ変・終　当・体　断・用　係助・強意　格助・引用

思ひ（おも）　ける　ころ　しも、　ある　所（ところ）　にて　夜（よ）　更く（ふく）る　まで　連歌（れんが）　し
八四・用　過・体　副助・強意　連　格助・場所　カ下二・体　副助・範囲　サ変・用

て、　ただ　ひとり　帰り（かへり）　ける　に、　小川（こがは）　の　はた　にて、　音（おと）
接助・単接　副　副　ラ四・用　過・体　格助・時間　格助・体修　格助・場所

に　聞き（き）　し　猫（ねこ）また、　あやまた　ず　足（あし）もと　へ　ふと　寄り来（よりき）
格助・状態　カ四・用　過・体　タ四・未　打・用　格助・方向　副　カ変・用

て、　やがて　かきつく　まま　に、　首（くび）　の　ほど　を　食（く）はん
接助・単接　副　カ四・体　格助・時間　格助・体修　格助・対象　八四・未　意・終

①「奥山に猫またというものがいて、人を食うそうだ。」とある人が言ったところ、「山ではなくても、この辺りにも、猫が年を経て変化して、猫またになって、人（の命）を取ることがあるそうだな。」と言う者がいたのを、なんとか阿弥陀仏とかいう、連歌を詠むことを仕事としていた法師で、行願寺の辺りに（住んで）いたのが聞いて、（自分のような）ひとり歩きをするような者は、気をつけなければならないことだと思っていたちょうどその頃、ある所で夜遅くまで連歌をして、ただひとりで帰ってきたときに、小川のほとりで、噂に聞いた猫またが、狙いを外さず（法師の）足もとにすっと近寄って来て、すぐに飛びつくと同時に、首の辺りを食おうとする。

と　す。　②胆心も　失せ　て、　防がん　と　する　に、
格助・引用　サ変・終　係助・強意　サ下二・用　接助・単接　ガ四・未　意・終　格助・引用　サ変・体　接助・逆確
力も　なく、　足も　立た　ず、　小川　へ　転び入り　て、
係助・列挙　形ク・用　係助・列挙　タ四・未　打・用　格助・方向　ラ四・用　接助・単接
「助けよ　や、　猫また　よ　や、　よ　や。」　と　叫べ　ば、　こ
カ下二・命　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　間助・呼掛　格助・引用　バ四・已　接助・順偶　代
家々　より　松ども　ともし　て　走り寄り　て　見れ　ば、
格助・起点　サ四・用　接助・単接　ラ四・用　接助・単接　マ上一・已　接助・順偶
の　わたり　に　見知れ　る　僧　なり。　③「これ　は　いかに。」
格助・連体　格助・場所　ラ四・已　存・体　断・終　代　係助・提示　副
と　て、　川　の　中　より　抱き起こし　たれ　ば、　連歌　の　賭け
格助・引用　格助・体修　格助・起点　サ四・用　完・已　接助・順偶　格助・体修
物　取り　て、　扇、小箱　など　懐　に　持ち　たり　ける　も、　水
ラ四・用　接助・単接　副助・例示　格助・場所　タ四・用　存・用　過・体　係助・同類
に　入り　ぬ。　④希有に　して　助かり　たる　さま　にて、　はふはふ
格助・場所　ラ四・用　完・終　形動ナリ・用　接助・単接　ラ四・用　完・体　格助・状態　副
家　に　入り　に　けり。
格助・場所　ラ四・用　完・用　過・終
⑤飼ひ　ける　犬　の、　暗けれ　ど　主　を　知り　て、
八四・用　過・体　格助・主格　形ク・已　接助・逆接　格助・対象　ラ四・用　接助・単接
飛びつき　たり　ける　と　ぞ。
カ四・用　完・用　過・体　格助・引用　係助・強意（略）

②（法師は）正気を失って、防ごうと思うが、力も出ず、足も立たず、小川に転げ落ちて、「助けてくれよ、猫また、ただ、猫またぞ。」と叫ぶと、（近くの）家々からたいまつをともして（人々が）走り寄って来て見てみると、この辺りで（顔を）見知っている僧である。③「これはどうしたことか。」と言って、川の中から抱き起こしたところ、連歌の会での賞品を得て、（その）扇や、小箱など懐に持っていたものも、（川の）水の中に入ってしまった。④九死に一生を得て助かったという様子で、はうようにして家に入っていった。

⑤（実は、法師の）飼っていた犬が、暗かったのに主人（が帰って来たの）を分かって、飛びついたのだったということだ。

学習活動のポイント

学習活動のポイント

❶ 古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。[知技(1)ウ・(2)ウエ]　→「言葉と表現」1

❷「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったかを読み取る。[知技(1)エ][思判表B(1)ア]　→「学習のポイント」1

❸「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動をまとめる。[思判表B(1)イ]　→「学習のポイント」2

❹ 最後の一文の表現上の効果を考える。[知技(1)ア][思判表B(1)ウ]　→「言葉と表現」2

❺ 作者が法師をどのような人物として描こうとしているか、考える。[知技(2)イ][思判表B(1)オ][主態]　→「言語活動」1

❶助動詞の意味を考えながら、正確な現代語訳を心がける。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、自然な表現で現代語訳ができているかにより、確認する。

展開

・時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、確認する。

❷「思ひけるころしも」の部分を手掛かりに思っていたことを簡潔にまとめさせる。わかりやすい展開なので口頭でまとめさせてみる。学校の事情によってはノートにまとめさせてもよい。

【評価】 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、口頭やノートにまとめさせて、確認する。

❸まず、場面に分ける。場面は次のように分けることができる。

・猫またの噂を耳にした場面
・夜更けに何かに飛びつかれた場面
・助けを求めた場面
・家に戻った場面

それぞれの場面での心情を本文に即して読み取ったり、想像したりしておくと、次の作業の際に役立つ。

【評価】 法師の様子と行動について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、口頭やノートにまとめさせて、確認する。

❹この話は「おち」のある面白い話である。その面白さをノートなどにまとめさせておく。その上で、それを効果的に語るために事実を最後まで伏せている構成の巧みさに気付かせる。似たような経験を出し合ったり、各自の考えに対して、どのように思うかなどを話し合わせるところまでいけるとよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・構成の巧みさと先入観の恐ろしさについて評価しているか、話し合いにより、確認する。

❺まず、当時の法師の理想像と現実とを調べさせる。その上で、ここに登場する主人公を当てはめて考えさせる。内容自体はさほど難しくないので、この段階で、生徒に興味を持たせることを主眼とし、生徒の意見が活発に出るようであれば、授業の成果と考えてよい。

【評価】古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、調べ学習により確認する。

・作者の描いた法師像について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めているか、話し合いにより確認する。

・進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、文語助動詞の種類と用法を理解し、学習課題に沿って、本文の描写を手がかりに作者の描く法師像について、積極的に話し合おうとしているか、分析する。

《板書例》「猫また」出現後の法師

・胆心も失せて
・力もなく、足も立たず
・小川へ転び入りて
　⇐（抱き起す）
・扇、小箱など…水に入りぬ
・希有にして助かりたるさまにて
・はふはふ家に入りにけり

指導上の注意点

●三四ページ

問 **「これら」（3行目）とは、何を指すか。**

答 この辺り。京都の町中を指す。

補 「奥山」に対応している。現代語では「これら」という言い方で場所を指すことはないが、古語では場所を指す近称の指示語ともなる。

問 **「ありけるを」（4行目）は、どこに続いているのか。**

答 聞きて

補 「ありけるを」が「聞きて」の目的格になっている。

問 **「連歌しける法師の」（4行目）の「の」の意味・用法を答えなさい。**

答 同格。「で」と現代語訳する。

補 「連歌しける法師」と「行願寺のほとりにありける（法師）」が同一人物を指している。

問 **◉「聞きて」（5行目）とあるが、どのようなことを聞いたのか。**

答 山ではなくこの近くでも、猫が年を経て変化して猫またになり、人の命を取るということがあるらしいということ。

補 係り受けを正確につかんで、「山ならねども…あなるものを。」が根拠となる部分であることを理解する。

語句の研究

●三四ページ

2猫また　伝説に描かれた動物。藤原定家の「明月記」天福元（一二三三）年の条に、目は猫のようで、体長は犬ほどの猫またが人を殺したとある。

2食らふなる　「なる」は伝聞の助動詞の連体形。「…だそうだ、…という噂だ」。連体止めで余情表現になっている。下文の「あなる」の「なる」も同じ。

2これらにも　このあたり、こちら側の意。京都の町中のこと。

2山ならねども　ここでは「ども」は逆接の確定条件を表す。「山ではないけれども」。

3経上がりて　年をとって変化して。昇進することの意味もあるが、ここでは猫が年を経て猫またに成り上がったことを指す。

3人取ること　「取る」は「命を取る、殺す」の意。

3あなるものを　「あなる」は「ある」の音便形「あん」に「なる」の接続した形で、撥音便の「ん」が表記されなかったもの。終助詞「ものを」は感動・詠嘆を表すが、ここでは「…（という話）なのに（知らないのか）」くらいの意。

4何阿弥陀仏　阿弥陀仏号という一種の法号で、「空阿弥陀仏」「明阿弥陀仏」などといったものの先頭の部分をぼかした言い方。後世の「観阿弥」「世阿弥」もその類。「某阿」号は連歌を嗜む者もよく用いた。

4とかや　下に「言ふ」「言ひて」が省略されている。

4連歌しける法師の　「法師」とあるが、僧侶ではなく、在俗のまま仏教に帰依した者（在家の沙弥）、在家僧か。生活の足しとして、半職業的に連歌の指導などを行っていたのであろう。後に続く文章からも分かるように、賭け連歌なども頻繁に行っていた。「の」は同格を表し、「で」と訳す。

5行願寺　寛弘元（一〇〇四）年、一条天皇の時行円上人によって開かれた天台宗の寺。当時、一条の北、油小路の東、京都市上京区にあった。現在は京都市中京区寺町通り竹屋町に移っている。行円上人は革衣を好んで着用していたため、革聖、革上人とも呼ばれ、この寺の本堂を俗に「革堂」と言う。

5ひとりありかん身は　「ひとり歩きをするような者は」。「身」は法師自身のことを言っている。

問「音に聞きし猫また」（8行目）は、どの部分を受けているか。

答「奥山に…」「山ならねども…」の冒頭の二つの噂話を受けている。

補「音に聞く」は「噂に聞く」という意の慣用句。この段は噂話を法師が耳にして、恐怖に感じるところから始まっている。

問「あやまたず」（8行目）「ふと寄り来て」「やがてかきつくままに」（9行目）という猫またの描写から、そのときの法師の心情を想像してみよう。

答噂に聞いて恐れていた猫またが自分を狙って、飛びついてきたと思い、強い恐怖感にとらわれていた。

補法師は猫まただと信じているから、自分の命を狙って、近寄って来たと思い、猫またの動作を必要以上に素早く感じている。最後に明かされるが、飼い犬がまっしぐらに主人に飛びついてくるのだから、素早くて当然である。

●三五ページ

問「連歌の賭け物取りて、…水に入りぬ。」（1行目）の部分からは法師のどのような面がうかがわれるか。

答法師と呼ばれてはいるが、連歌の賭け物として、日用品をたくさん持ち帰るような俗な面を持っている。

5心すべきことにこそ　「心す」はサ変動詞で、「注意する、気をつける」の意。「べき」は当然を表す助動詞。係助詞「こそ」の下には、「あれ」が省略されている。

6ころしも　「ちょうどその頃」。「しも」は副助詞で、強意を表す。副助詞「し」に係助詞「も」が付いたものと考える説もある。

7小川　行願寺の辺りを流れ、堀川に注ぐ川の名。固有名詞である。

8音に聞きし　「音に聞く」は「噂に聞く」という意の慣用句。「し」が用いられていることから、冒頭の作者が直接聞いた噂が踏まえられていることが分かる。

8あやまたず　「狙いを外さず、間違いなく」。「まっしぐらに」と考える説もある。下文の「ふと」も素早い動作を表している語で、何かに襲われたと思った法師が猫またに違いないと思い込んだことから生じた判断によった表現と考えられる。

9やがてかきつくままに　「やがて」は「すぐに、そのまま」。「かきつく」は「取りつく、飛びつく」。「ままに」は「すると同時に」の意。このあたりも猫またの素早い動作を表していると共に、法師に考える余裕を与えないことを示している。

10胆心も失せて　「胆」には「心、思慮」の意があり、「胆心」も「心」に同じ。「胆心うす」で「正気を失う」の意の慣用句である。「肝を潰す」。

12助けよや、猫またよや、よや　文法的説明、現代語訳共に諸説あるところである。「助けよや」を動詞の命令形「助けよ」に呼びかけの間投助詞「や」の付いたものとした。また、「猫また」に付いている「よやよや」の「よ」も呼びかけの間投助詞で「よ」「や」が重ねて用いられているとした。「助けてくれよ、猫まただぞ。」と近くの人に助けを求めているのである。①「助けよや、猫またよや」の反復、②「助けよや」の反復、③「猫またよや」の反復などの説があるが意味としてはいずれの説を採っても同じようなものになると考えてよいであろう。

13松ども　「松」は「たいまつ」のこと。「ども」は複数を表す接尾語。何人かの近くの人が助けに出てきたのであろう。

14見知れる僧　「見知る」は「顔見知りである、交際がある」。「見知れる」の「る」は存続の助動詞「り」の連体形。「僧」は「連歌しける法師」の「法師」と同一人物。法師の家のすぐそばまで帰って来ていたこ

補 連歌をするということに始まり、犬を飼うことなども俗なことなのであろう。そのような俗な面が猫またの噂におびえるという心理状態を作り上げてもいるのだろう。

問 **「飼ひける犬の…」（4行目）以下の最後の文はどのような効果を上げているか。**

答 猫またの正体を明かしている。また、区切れを短くして、それまでの話に感情移入していたような感じとは異なり、突き放したような感じがある。

補 感じ方はそれぞれあるだろうが、最後の一文の持つ、冷静な感じは味わいたい。明かされてみれば、猫またについての全ての行動が納得のいくものであることが分かる。とが分かる。

●三五ページ

1こはいかに　「これはどうしたことか」。下に「しつることぞ」などを補う。

1連歌の賭け物取りて　「賭け物」は勝負事に賭けられ、勝者に与えられる賞品。ここは連歌の席で、秀逸な句を作ったので与えられた物であろう。「取る」は「得る、獲得する」の意。

2希有にして　「希有に」は形容動詞「希有なり」の連用形。「珍しく、不思議なことに」の意であるが、ここでは状況を踏まえ、「九死に一生を得た」とする。「して」は上の「希有に」を強めている。

3はふはふ　「這ふ」を重ねて、強めた言い方。慌てて逃げる様子を表している。

4飼ひける犬の　法師が飼っていた犬である。「の」は主格を表し、「飛びつき」に続く。

4主　「飼い主」のこと。法師を指す。

4飛びつきたりけるとぞ　下に「言ふ」「聞く」などの結びが省略されている、慣用的な言い方。説話などに多く用いられる。

鑑賞

この段では、まず、ある事件のことが語られる。部分部分に古文特有の表現はあるものの、全体的には平易な語り口である。展開もスピーディーなので、じっくり読むと、事件について、だいたいのところは読み取ることができるであろう。その際に、押さえておきたいのが、冒頭に語られる噂話の部分である。いつの世でも噂話が好きなことは変わらない。特にそれが根も葉もないことだと、余計におもしろがって尾鰭が付く。ここも、確かなことは分からないが、噂が噂を呼んでいるというふうに読み取れる。ところが、この法師はそれを単なる噂として聞き流すことはしない。噂を信じ切って、恐怖心を自分の心に植え付けるのである。ここにいわゆる先入観というものが出来上がる。「この近くにも猫またという怪物が現れる」「猫またに襲われると命を落としてしまう」といった考えが法師の頭の中に忍び込む。この後は、その先入観にしたがって、全ての物事が法師の中で処理されていく。何かが近寄ってくる気配がすれば、それは猫またに違いないし、必ず食い付かれて命を落とすに違いないと思うのである。そのような心情に支配されてしまうと人間、何もできなくなるということが、「胆心も失せて」「力もなく」「足も立たず」などの表現からうかがわれる。このあたりも法師の心情をうまく踏まえながら、たたみかけるように話を展開させていく書きぶりは見事と言うほかない。猫またの描写から、法師の様子の描写はこの段の読みどころである。「助けよや、猫またよや、よや。」という法師の助けを乞う叫びも、混乱の中で出した叫び声らしく響いてくる。法師自身、何と言っているか、まともには分からなかったのではないだろうか。「希有にして助かりたるさまにて」と法師は最後まで猫またに襲われたことを疑ってはいない。おそらく、助けに出てきた人々のたいまつの明かりによって、猫またが何であるのかが分かったはずなのに、法師の目にはそれが正しく見えないのである。この段は「滑稽な話」と言われている。しかし、このように読んでみると、この法師を笑ってばかりはいられないという気にもなってくる。先入観にとらわれて、正しく物事が見られないことは、我々にだって決して少なくはない。法師を笑い飛ばす一方で、冷静に我が身を振り返ることも必要だろう。このような視点こそが「徒然草」の大きな特徴なのである。多少お説教くさいのは仕方がないが、これほど分かりやすい例で、誰にでもある間違いを説くのはやさしいことではない。そして、今回の教訓は、最後の一文で種明かしをするという構成によって、ぐっと引き立っている。何の感情もこもっていないような口振りで、事実だけを簡潔に記す。だからこそ余計に印象が強く、話をその事実をもとに振り返ったとき、改めて「なるほど」と思わされる表現に数多く出会うことになる。このような「滑稽な話」は「徒然草」には幾つもある。これに限らず、幾つかを紹介することがあってもよいだろう。高校時代は「何を言っているのだか」と肯定的に受け取ることができないような話でも、いつか、ふとした機会に「そういえば、高校時代に似たような話を読んだ気がする」と懐かしく思うこともあるだろう。分かりやすく、印象に残る話はこの時点での古文学習には最適なものだと思われるのである。

《板書例》「猫また」出現後の法師

・胆心も失せて
・力もなく、足も立たず
・小川へ転び入りて
　⇦（抱き起す）
・扇、小箱など…水に入りぬ
・希有にして助かりたるさまにて
・はふはふ家に入りにけり

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「猫また」のうわさを聞いて、法師はどのように思ったか、本文中から抜き出してみよう。**

【答】 ひとりありかん身は、心すべきことにこそ。

▼ポイント▲ 「奥山に猫またがいる」「このあたりにも猫またが出る」という話を聞いて、法師の思ったことを抜き出す。「と思ひけるころしも」とあるのに着目する。

2 **「猫また」が現れた後の、法師の様子と行動を、順を追って、箇条書きにしてみよう。**

【答】 1　「正気を失う」（胆心も失せて）
2　「力も出ず、足も立たない」（力もなく、足も立たず）
3　「小川に転げ入る」（小川へ転び入りて）
4　「九死に一生を得て助かった」（希有にして助かりたるさまにて）
5　「はうようにして家に入っていった」（はふはふ家に入りにけり）

▼ポイント▲ 丁寧に記述を追って、法師の様子や行動を抜き出していけばよい。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。**

(1) **人を食らふなる。（三四・2）**
(2) **山ならねども（三四・2〜3）**
(3) **人取ることはあなるものを。（三四・3〜4）**
(4) **見知れる僧なり。（三四・14〜三五・1）**

【答】 (1)　伝聞／連体形　(2)　断定／未然形　(3)　伝聞／連体形
(4)　断定／終止形

2 **最後の一文は、表現上どのような効果を上げているか、考えてみよう。**

【答】 最後まで「猫また」という怪物の話だと思わせておいて、最後に種明かしをしている。飼い犬が暗くても飼い主に飛びついて喜ぶことは誰にでも容易に想像ができるだろうから、この話に信ぴょう性を持たせる効果が期待できる。

言語活動の解答例

1　作者は法師をどのような人物として描こうとしているのか。本文の描写を手がかりにして、話し合ってみよう。

（意図）法師の人物像を深く読み取ることで、作者が主人公の法師をどのように捉えているかを知り、それを自分たちのこととして考えさせたい。

（手順）

1　本文の描写を手掛かりにしながら、作者が描こうとした主人公像を読み取る。いずれの意見にしても、作者はこの法師を批判的に捉えていることを読み取るようにしたい。

・「猫また」の噂を必要以上に恐れているように見えること。↓心の平静さを感じられない。

・連歌の賭物を懐に持っていた。↓法師の身分で賭事をしているのは俗なことである。

・「ひとりありかん身」↓頼る人もいない

・「飼い犬」↓犬を飼うことも俗である

2　作者の描き方に対して、自分の考えをまとめ、意見交換してみる。そこから、自分たちが何者かになって生きていくうえで、どのような心持ちや行為がふさわしいのかを考えられるようになるとよい。

・法師は修行の結果ふつうの人よりも高い次元の心持ちのある人であるべきだ。作者自身も法師であるから、法師のあり方、特に「えせ法師」に対しては厳しい見方をしているのであろう。

（ゴール）先に述べたように、できればこの話を参考に、将来的にであっても、自分に引き付けて考えることができるとよいが、当面、作者がこの笑い話を批判的意図で記していることを読み取りたい。

（畠山　俊）

花は盛りに

（第百三十七段）

要旨

花や月を見るのは、盛りのときだけがよいのではない。花は、盛りの前や後のほうが趣深いこともある。何事も同じで、恋の情趣も、逢えないつらさを嘆くことなどもよいものである。月も、満月よりも木の間から見えたり、雲に隠れたりした月が情趣を感じさせるのである。何事も目で見るだけではなく、心で感じるのがよく、さりげなく鑑賞するのが情趣を解する人のやり方である。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め～P三六・8〈言ふめる。〉	花や月は、盛りのときだけがよいのではない。花は、盛りの前後にも見どころはあるし、花を見られなかったことも情趣がある。
第二	P三六・9〈よろづのことも〉～P三六・12〈色好むとは言はめ。〉	多くのことも初めや終わりがよい。恋も逢えないことや不実を嘆くこと、かつての恋人を思い出すことも情趣がある。
第三	P三六・13〈望月の〉～P三七・3〈おぼゆれ。〉	月も、満月よりも木の間から漏れる雲がかかった月などは、情趣を解する友人が懐かしくなるほどよいものである。
第四	P三七・4〈すべて、月・花をば〉～終わり	すべてが目で見るだけではなく、心で感じることが大切である。さりげなく、情趣を感じることが情趣を解する人のやり方である。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①花（はな）　は　盛（さか）りに、　月（つき）　は　くまなき　を　のみ　見（み）る　もの
係助・提示　形動ナリ・用　係助・提示　形ク・体　格助・対象　副助・限定　マ上一・体

かは。　②雨（あめ）　に　向（むか）ひ　て　月（つき）　を　恋（こ）ひ、　垂（た）れこめ　て　春（はる）　の
係助・反語　格助・対象　八四・用　接助・単接　格助・対象　八上二・用　マ下二・用　接助・単接　格助・体修

行方（ゆくへ）　知（し）ら　ぬ　も、　なほ　あはれに　情（なさ）け　深（ふか）し。　③咲（さ）き　ぬ
ラ四・未　打体　係助・同類　副　形動ナリ・用　形ク・終　カ四・用　強・終

べき　ほど　の　梢（こずゑ）、　散（ち）り　しをれ　たる　庭（には）　など　こそ、　見（み）どころ
推・体　格助・体修　ラ四・用　ラ下二・用　完・体　副助・例示　係助・強意（係）

多（おほ）けれ。　④歌（うた）　の　詞書（ことばがき）　に　も、　「花見（はなみ）　に　まかれ　り　ける
形ク・已（結）　格助・体修　格助・場所　係助・同類　格助・目的　ラ四・已　完・用　過・体

に、　はやく　散（ち）り過（す）ぎ　に　けれ　ば。」　と　も、　「障（さは）る　こと
接助・逆確　副　ガ上二・用　完・用　過・已　接助・順理　格助・引用　係助・列挙　ラ四・体

あり　て　まから　で。」　など　も　書（か）け　る　は、　「花（はな）
ラ変・用　接助・理由　ラ四・未（了）書き手→読み手　接助・打接　副助・例示　係助・列挙　カ四・已　存・体　係助・提示

を　見（み）　て。」　と　言（い）へ　る　に　劣（おと）れ　る　こと　かは。　⑤花（はな）
格助・対象　マ上一・用　接助・単接　格助・引用　八四・已　存・体　格助・比基　ラ四・已　存・体　係助・反語

の　散（ち）り、　月（つき）　の　傾（かたぶ）く　を　慕（した）ふ　習（なら）ひ　は、　さる　こと
格助・主格　ラ四・用　格助・主格　カ四・体　格助・対象　八四・体　係助・提示　連

なれ　ど、　ことに　かたくなる　人（ひと）　ぞ、　「この　枝（えだ）、　か
断・已　接助・逆確　副　形動ナリ・体　係助・強意（係）　代　格助・体修

の　枝（えだ）　散（ち）り　に　けり。　今（いま）　は　見（み）どころ　なし。」　など　は
格助・体修　ラ四・用　完・用　過・終　係助・区別　形ク・終　副助・例示　係助・強意

①（桜の）花は満開のさま（だけ）を、月は曇ったところがない（澄み切った）ものだけを見るものだろうか（いや、そればかりではないだろう）。②雨に向かって（見えない）月を恋しく思い、（簾などを）垂らして（部屋に）閉じ籠もって春の暮れていくのを知らないのも、やはりしみじみとして情趣が深いものである。③（今にも花が）咲きそうな頃の梢や、（花が）散ってしおれてしまった庭などこそ、見どころが多いものだ。④和歌の詞書にも、「花見に参りましたが、もう散ってしまっていたので。」とも、「差し支えがあって（花見に）参りませんで。」などとも書いてあるのは、「花を見て。」と書いてあるのに劣っていることであろうか（いや、劣ってはいないだろう）。⑤花が散り、月が（西に）傾くのを残念に思う（人々の）習慣はもっともなことであるけれども、とりわけ情緒を解さない不粋な人が、「この枝も、あの枝も散ってしまった。もう見どころがない。」などとは言うようである。

言ふ　める。
八四・終　婉・体（結）

⑥よろづ　の　こと　も、　初め　終はり　こそ　をかしけれ。　⑦男
格助・体修　係助・同類　係助・強意（係）　形シク・已（結）

女　の　情け　も、　ひとへに　逢ひ見る　をば　いふ　もの
格助・体修　係助・同類　副　マ上一・体　連語（格助・対象＋係助・強意）　八四・体

かは。　⑧逢は　で　やみ　に　し　憂さ　を　思ひ、　あだなる　契り
係助・反語　八四・未　接助・打接　マ四・用　完・用　過・体　格助・対象　八四・用　形動ナリ・体

を　かこち、　長き　夜　を　ひとり　明かし、　遠き　雲居　を
格助・対象　タ四・用　形ク・体　格助・経時　サ四・用　形ク・体　格助・対象

思ひやり、　浅茅が宿　に　昔　を　しのぶ　こそ、　色好む　と
ラ四・用　格助・場所　格助・対象　バ四・体　係助・強意（係）　マ四・終　格助・引用

は　言は　め。
係助・強意　八四・未　推・已（結）

⑨望月　の　くまなき　を　千里　の　外　まで　ながめ　たる
格助・主格　形ク・体　格助・対象　格助・体修　副助・範囲　マ下二・用　存・体

より　も、　暁　近く　なり　て　待ち出で　たる　が、　いと
格助・比基　係助・強意　形ク・用　ラ四・用　接助・単接　ダ下二・用　完・体　格助・主格　副

心深う、　青み　たる　やうに　て、　深き　山　の　杉　の　梢
形ク・用（ウ音）　マ四・用　存・体　比・用　接助・単接　形ク・体　格助・体修　格助・体修

に　見え　たる、　木の間　の　影、　うちしぐれ　たる　群雲隠れ
格助・場所　ヤ下二・用　存・体　格助・体修　ラ下二・用　完・体

の　ほど、　またなく　あはれなり。　⑩椎柴、　白樫　など　の、　濡れ
格助・体修　形ク・用　形動ナリ・終　副助・例示　格助・体修　ラ下二・用

⑥（花や月だけではなく）何事でも、初めと終わりがことに趣深いものだ。⑦男女の恋愛でも、ひたすら逢って契りを結ぶことだけを（恋愛と）言うのであろうか（いや、そうではないだろう）。⑧結ばれないで終わってしまった（恋の）つらさを思い、はかなく実を結ばなかった（恋人との）約束を嘆き、長い夜を（逢うこともできず）ひとり（寂しく）明かし、遠く離れた場所（に住む恋人）に思いをはせ、（今はさびれた）茅が生い茂った荒れた家で（共に過ごした）昔を懐かしく思い出すのこそ、恋の情緒が分かると言えよう。

⑨満月が曇りなく照らしているのをはるか遠い所まで眺めているのよりも、明け方近くなって待ちに待って（ようやく）出てきた月が、たいそう趣深く、青みをおびているようなさまで、深い山の杉の梢に見えている、（その）木の間（越し）の月の光や、さっとしぐれを降らせた群雲に隠れた（その月の）様子などが、この上なく情趣深い。⑩小さな椎の木や白樫などの、濡れて

たる　やうなる　葉の　上に　きらめき　たる　こそ、　身に
存・体　比・体　格助・体修　格助・場所　カ四・用　存・体　係助・強意(係)　格助・対象

しみ　て、　心　あら　ん　友　もがな　と、　都　恋しう　おぼゆれ。
マ四・用　接助・単接　ラ変・未　婉・体　終助・願望　格助・引用　形シク・用(ウ音)　ヤ下二・已(結)

⑪すべて、　月・花　を　ば、　さ　のみ　目　にて　見る　もの
副　連語(格助・対象＋係助・強意)　副　副助・限定　格助・手段　マ上一・体

かは。　⑫春　は　家　を　立ち去ら　で　も、　月　の　夜
係助・反語　係助・区別　格助・起点　ラ四・未　接助・打接　係助・列挙　格助・体修

は　閨　の　内　ながら　も　思へ　る　こそ、　いと　頼もしう、
係助・区別　格助・体修　接助・継続　係助・列挙　八四・已　存・体　係助・強意(係)　副　形シク・用(ウ音)

をかしけれ。　⑬よき　人　は、　ひとへに　好け　る　さま　に　も
形シク・已(結)　形ク・体　係助・区別　副　カ四・已　存・体　断・用　係助・同類

見え　ず、　興ずる　さま　も　なほざりなり。　⑭片田舎　の　人
ヤ下二・未　打・用　サ変・体　係助・同類　形ナリ・終　格助・体修

こそ、　色濃く　よろづ　は　もて興ずれ。　⑮花　の　もと　に
係助・強意(係)　形ク・用　係助・強意　サ変・已(結)　格助・体修　格助・対象

は、　ねぢ寄り　立ち寄り、　あからめ　も　せ　ず　まもり　て、　酒
係助・区別　ラ四・用　ラ四・用　係助・強意　サ変・未　打・用　ラ四・用　接助・単接

飲み、　連歌　し　て、　果て　は、　大きなる　枝、　心なく　折り取り　ぬ。
マ四・用　サ変・用　接助・単接　係助・区別　形ナリ・体　形ク・用　ラ四・用　完・終

⑯泉　に　は　手・足　さし浸し　て、　雪　に　は　下り立ち
格助・対象　係助・区別　サ四・用　接助・単接　格助・場所　係助・区別　タ四・用

て　跡　つけ　など、　よろづ　の　物、　よそながら　見る　こと
接助・単接　カ下二・用　副助・例示　格助・体修　副　マ上一・体

いるような（光沢のある）葉の上に（月の光が）きらきら輝いているのは、身にしみて、この情緒を解するような友がいてほしいなあと、（そのような友がいる）都が恋しく思われる。

⑪総じて、月や花とはそのように目だけで見るものだろうか（いや、そうではない）。⑫春（の桜の頃）は家から外へ出ずとも、（秋の）月の夜は寝室の中にいるままでも、（桜や月のことを）思い描いていることこそ、まことに確実に、情趣を感じられるのである。⑬教養があり情趣を解する人は、むやみに愛好する様子にも見えず、楽しむさまもあっさりとしている。⑭片田舎の人こそ、しつこく何事ももてはやすのだ。⑮（花を見るときも）花のもとに、ねじり寄り近寄り、脇目もふらずじっと見つめ、酒を飲み、連歌をして、果てには大きな枝を、思慮もなく折り取ってしまう。

⑯（そんな人たちは）泉には手足を浸し、雪には下りたって跡をつけるなど、あらゆるものを、それとなく見るということがない。

なし。
形ク・終

学習活動のポイント

展開

学習活動のポイント

❶古語の意味・用法、文法事項に注意して現代語訳する。知技(1)ウエ・(2)ウ 思判表B(1)ア　→**「言葉と表現」1**

❷「花」「男女の情け」「月」のそれぞれについて、作者が好ましいと考えている状態をまとめる。知技(2)エ 思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」1**

❸「よそながら見る」とは、どのような態度か、読み取る。思判表B(1)ウ　→**「学習のポイント」2**

❹作者の立論のしかたの特徴を捉え、それをどのように評価するか考えさせる。主態　→**「言語活動」1**

❶係り結びや反語表現に留意し、論理の展開を追いながら、正確に現代語訳する。語句を抜き出して品詞分解させるなどして、重要な文法事項については、きちんと確認しておく。小テストという方法もあるし、板書してノートに書かせたものを確認するのでもよい。正解を全員に正しく伝えることは欠かせない。そのうえで、現代語訳を確認する。これも、押さえたい部分を小テストで確認するなどしてから、全体を通して、分かりやすい現代語訳になっているか、検討する。徐々に逐語訳から離れて、意味の分かりやすい訳となっているかを意識できるようにさせる。各自の訳を、お互いに添削するという方法もある。

【評価】我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、現代語訳により、確認する。

・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストより、確認する。

・文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、生徒同士の現代語訳の相互評価などにより、確認する。

❷段落ごとに「花」「男女の情け」「月」と主題が分れているので、各段落を読みながらまとめさせる。それぞれの項目についての作者の主張をノート等に書き出させる。その際に一般論も併記しておくとわかりやすい。一方的に一般論を否定しているわけではないことには注意したい。一般論はどういうものか。それに対して作者は何を主張しているのかを対置して、まとめる。両者の関わりが正しく説明できればよい。読解後なら、口頭で説明させ、過不足をその場で指摘しても理解させられるだろう。作者の主張自体は決して分かりにくいものではない。文章の修

辞などにごまかされないように注意させたい。

【評価】 時間の経過による文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

・作者の考え方について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❸四段落目から作者の物事を鑑賞する態度への評価を読み取り、まとめる。「よそながら見る」ことを作者は評価しているのである。その態度と対照的な態度にも言及しているのでまとめやすいだろう。

【評価】 作者の考え方について、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❹作者の論の特徴を捉えさせる。反語表現の多用からも考えられる。その上で作者の主張やそのやり方をもっともだと思う生徒、ちょっと考えが異なる、やり方には同意できないと思う生徒が出てくるだろうから、数人で意見交換させるとよい。意見交換後、改めて各自の意見を確認するのもおもしろい。大きく分けると、一般論にくみするものとそれに異議を唱える作者にくみするものとの二つに分かれるだろう。例のあげやすいものなので、実際に例をあげさせながら、主張を説明させるのがよい。作文としてまとめさせて、それを添削し評価する方法と、ディベートをさせて実際に意見を述べさせるという観点を加えて評価する方法とが考えられる。どちらも具体例から自説を導く過程がうまく展開されているかを現段階での重点課題としたい。

【評価】 進んで「徒然草」に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、学習課題に沿って、論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたについて話し合おうとしているか、分析する。

《板書例》1　作者の主張（～～は一般論）

（花）花は盛りに、…のみ見るものかは。
↓ 見どころは満開の桜だけではない。

（男女の情け）ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。
↓ 一途に逢つて契りを結ぶことだけではない。

（月）望月のくまなきを…よりも、…。
↓ 曇りのない満月を眺めるよりも…。

《板書例》2　鑑賞態度の違い

情趣のわかる人　「なほざり」「よそながら」　粋
↔
片田舎の人　「色濃く」「ねぢ寄り立ち寄り」
（情趣のわからない人）　「あからめもせず」　無粋

まとめと発展

学習活動のポイント

❶ 各章段における作者の主張をまとめ、さらにそれに対する自分の考えをまとめる。思判表B(1)オ

❷ 序段も参考にしながら、随筆の特色を理解し、作品内容の多様性に興味を持つ。知技(1)ア・(2)イ

❶各章段の読解後、それぞれ内容や作者の主張をまとめていれば、それを読み返すのでもよい。その上で、各章段について各自の考えを書き添える。作者の主張や登場人物について自分の身に引きつけながら考え深められるとよい。

【評価】 各章段における作者の主張について、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもっているか、ノートのまとめや意見文により、確認する。

❷「参考」の序段を読んで、随筆とはどのようなものか、項目立てして整理する。「よしなしごと」を集めるからこそ、多様な内容を含むことを理解する。さらに、短い章段もあるし、内容もそれほど難しくはないので、自分で原文を読んでみることを勧める。

【評価】 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

指導上の注意点と発問例

●三六ページ

問　**「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」（２行目）について、**
[1]「花」は、ここでは桜の花を指すが、「盛り」は、花のどのような状態を言うのか。
[2]「月はくまなきを」の「くまなき」とは、月のどのような状態を言うのか。
[3]「見るものかは」を現代語訳せよ。

答　[1]満開の状態。[2]月面に隈（曇り・影）のない状態。満月のときに、雲で隠れたりすることなく輝き光る状態。[3]見て賞美するものであろうか（いや、そうとは限らない）。

問　**(1)「雨に向かひて月を恋ひ」（２行目）、(2)「垂れこめて春の行方知らぬ」（２行目）とは、それぞれどのような状態か。**

答　(1)　降る雨を見ながら、姿を見せない月を恋しく思っている状態。(2)　簾（すだれ）や帳（とばり）などを垂らして部屋に閉じ籠もっていて、春の移り変わりも知らずにいる状態。

問　**どうすることを「なほあはれに情け深し」（３行目）と言っているのか。**

答　「雨に向かひて月を恋」うこと（降る雨に対しながら、見えぬ月を心に慕うこと）。また「垂れこめて春の行方知らぬ」ことである。

語句の研究

●三六ページ

２花は盛りに　「花」はここでは「桜の花」である。平安後期に固定した考え方と見られ、それ以前には「梅」を指すことも多い。「盛りに」は「満開の状態」を表す形容動詞の連用中止法であり、「花は盛りに」と「月はくまなき」はともに下の「をのみ見るものかは」に係る。

２月はくまなきを　「くまなし」はここでは「（月が）雲に少しも隠されていない状態」のこと。満開の桜と満月は春・秋を代表する景物とされていた。

２見るものかは　「見るものだろうか（いや、そればかりではない）」。「かは」は反語の意味を表す係助詞。この章段では反語が重要な意味を持つので正確に訳したい。一般的に陥りやすい考え（最高のものだけがよいという考え）を反語で一旦否定した後、自分の考えを展開していく構成になっている。

２雨に向かひて月に恋ひ　「類聚句題抄」に源順の「対雨恋月」という題での詩作がある。雨天に対して見えない月を恋い慕うのである。

２垂れこめて春の行方知らぬも　家の中に閉じこもって過ぎてゆく春の行方を知らないのも。「垂れこめて」は、帳や簾を下ろしてその中に身を引き籠もらせての意。「古今和歌集」春下「たれこめて春の行方もしらぬまに待ちし桜もうつろひにけり」（藤原因香）によるか。この歌の詞書に「心地そこなひてわづらひける時に、風にあたらじとておろしこめてのみ侍りけるあひだに、をれる桜のちりがたになれりけるを見てよめる」とあり、病を患った作者が簾を垂れて籠もっている間に、折り枝の桜が散っていくのを見て詠んだ歌。見ることのできない外の桜と春の移ろいを想うのである。

３なほあはれに情け深し　「なほ」は「それでもやはり」の意。「…も、やはり」で、「満開の桜」「雲のかからない月」を賞美するのは当然だが、「雨の日に見えない月を思う」「家に居て、花の様子を想像する」ことも「情け深い」という意味になる。一般論を否定しているのではないことに注意する。「雨に向かひて…」「垂れこめて…」の二つの部分はいずれも古句・古歌を踏まえており、古来より作者と同じような感じ

（簾を垂らして、部屋の中に身を引き籠もらせて春の暮れてゆくありさまを知らないこと）。

問 **「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。」（３行目）と同じ趣旨のことを言っている一文を、第二段落から抜き出せ。**

答 よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。

問 **「『花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ。』とも、…『花を見て。』と言へるに劣れることかは。」（４行目）とあるが、どのような理由から、そう主張しているのか。**

答 作者の美意識から言うならば、花というものは満開だけを見るものではなく、今にも咲きそうな梢や、散りしおれた庭、また花自体を見ることができないことなども趣深いものだから。

問 **◉「花を見て。」（６行目）という詞書と比べて、他の二つの詞書には、どのような共通点があるか。**

答 満開の桜の花を実際に見たり、それらが散るのを惜しむ従来の桜を賛美する場とは異なる状況の中で詠んだ歌であるという点。

補 直後の文章に「花の散り、月の傾くを慕ふ習ひは」とあることから、満開の桜の花を方をしていたことを示している。

3咲きぬべき　「（今にも花が）咲きそうな」。「ぬ」は強意（確述）の助動詞。

3散りしをれたる　「散り」「しをれ」の二語とし、複合語とはしなかった。桜の花が散って、それが地面でしおれていくと考えたほうが自然だからである。

4歌の詞書　和歌の前に、成立の事情、趣旨などを散文で記したもの。ここでは、自分の考えを補強するものとしてあげている。

4まかれりけるに　「まかる」は「来」「行く」の謙譲語。ここでは「行く」の意。中古の語法では「尊い人の所から退出する（「参る」の反意語）」ことだが、平安以後は丁寧語としての用法を発達させた。「に」は逆接の接続助詞。他に「花見に参りましたところ」と単純接続に解釈する説もある。

5散り過ぎにければ　下に「詠める（歌）」などを補って考える。なお、この詞書は作者の創作とも考えられるが、類似したもので「新古今和歌集」春下・良暹法師歌に

雲林院のさくら見にまかりけるに、みなちりはてて、わづかにかたえに残りて侍りければ
たづねつる花もわが身もおとろへて後の春ともえこそちぎらね

「新千載和歌集」春下・藤原義孝歌に

権大納言延光のもとに花見にまかりたりけるにはやちりにければよめる
桜花まだみぬ程にちりにけりのちの春だに心あらなん

とある。「新千載和歌集」の成立は「徒然草」よりも後だが、作者の義孝は平安時代中期の歌人であることから、その詞書の内容を兼好が思い出しながら書いたとも考えられる。

5まからで　下に「家にありて詠める（歌）」などを補う。「で」は打消の接続助詞「ずして」が「ずて」になり、さらにつづまったもの。前の詞書は花見に行き、これは実際には出かけていないが、いずれも花は見ていない場合について言っている。

5なども　「も」は同種のものを列挙する係助詞。「などとも」とあるべきところで、引用の「と」が省略されている。

6劣れることかは　「劣っていることだろうか（いや、劣ってはいない）」。「かは」は反語の意味を表す係助詞である。

7さることなれど　「もっともなことであるけれども」。上の「慕ふ」は「あとを追い

目にして、それが散るのを惜しむのが通例であったことがうかがえる。今回の文章はそれ以外の情景にも美しさが見いだせることを指摘したものであることをつかませる。

問「さることなれど」（7行目）は、次のどの意味に用いられているか。

(ア) 当然そうあるべきことで、そうあってほしいことなのだが
(イ) そういう気がして仕方ないのだが
(ウ) そういう昔からの習わしであるが
(エ) 一般の人情としては、自然であるが
(オ) それもつまらない取るに足りないことだが

答(エ)

問「かたくななる人」（7行目）は、なぜ「この枝…見どころなし。」（7行目）と言うのか。

答 桜の花は満開の時だけが見る価値があると思い込むので、散ってしまったら見ても意味がないと考えるから。

補 作者が考える「かたくなる人」のことである。作者は満開のときだけではなく、その前にも、その後にも、桜には風情があると考える。だから、満開だけを賞美するような人は無風流なのである。

問「遠き雲居」（11行目）「浅茅が宿」（11行目）は、それぞれ、その人にとってどのような離れにくい気持ち」のことで、「残念に思う」に近い意。「花が散る」ことと「月が沈む」こととを残念に思うのが「自然なこと」だと言うのである。その一般論を認めておいて、それだけではないという考えを展開していくのである。

7かたくななる人　「情緒を解さない不粋な人」。「かたくなり」は物事を固定的に考え、柔軟な思考ができないことを示す。ここでは、一般論に捉われて、それに従ってしか物事を見ることのできないことを言う。

8言ふめる　言うようである。「める」は婉曲の助動詞「めり」の連体形。距離を置いて、婉曲に余情をこめる表現。

9よろづのことも　花と月のことを受けて、それ以外の「全てのことも、何事でも」と論を発展させている。

9男女の情け　「情け」はここでは「恋愛」の意。花と月で自然の情緒について述べ、恋愛で人と人の間の情緒について述べようとしているとも考えられる。

9ひとへに逢ひ見る　「逢ひ見る」は恋人同士が逢って契りを結ぶこと。これが全て満たされた状態である。「ひとへに」は「いふものかは」に掛かって、「ひたすら」の意。花や月と同様の論の展開の仕方である。

10逢はでやみにし憂さ　「結ばれないで終わってしまった（恋の）つらさ」。これを始めとして、「浅茅が宿に昔をしのぶ」まで、報われぬ恋のパターンが五つ記されている。「あだなる契りをかこち」は結婚などの約束が遂げられなかった嘆き、「長き夜をひとり明かし」は恋しい人と夜を過ごすことができず、ひとり寂しく明かす様子、「遠き雲居を思ひやり」は遠くにいる恋しい人に思いをはせている様子、「浅茅が宿に昔をしのぶ」は昔の恋を終わったあとに思い出している様子をそれぞれ表している。「ひとへに逢ひ見る」を「盛り」の状態として、「盛り」に至らない場合や、それが過ぎてしまった場合などの、満たされていない状態を示し、第一段の桜の花の状態に応じている。この部分については、男性の視点から全て捉えた解釈もある。しかし「長き夜をひとり明かし」などは、「（待っても来ない恋人を待ちわびて）長い夜をひとり寂しく明かす」とすれば女性の立場となり、「蜻蛉日記」などで多く見られる場面になる。また、「待つ恋」という題で歌を詠む場合は、男であっても女の立場で読

うな場所か。

答 「遠き雲居」は、遠く離れてしまった恋しい人の居る場所。「浅茅が宿」は、恋しい人が居た場所で、今は荒れ果ててしまった家。「男の落ちぶれてしまった境遇を示す」という説もある。

補 いずれにしても、恋しい人とは逢えない状況であることを示している。いわば「満開ではない桜の花」と同じである。

問 **◉「昔をしのぶ」（11行目）とあるが、ここではどのようなことをしのんでいるのか。**

答 荒廃した家で恋人と逢っていた昔の思い出。

補 直前にさまざまな例があげられているが、内容と係り受けを正確に把握すれば対象となる表現が「浅茅が宿に」だけに限定されると分かるはずだ。

問 **第二段落には、恋が成就しなかった場合を五つ書いている。それぞれどのような恋か、本文の語を用いて答えよ。**

答 ①「逢はでやみにし（結ばれないで終わってしまった）」恋　②「あだなる契り（むなしい約束）」となった恋　③「長き夜をひとり（長い夜を恋しい人と共に過ごすことなく一人で）明か」す恋　④「遠き雲居（遠く離れてしまった恋しい人のいる所）を思ひや」る恋　⑤「浅茅が宿に昔をしのぶ（荒れ果てた場所で共に過ごした昔を思む場合が多いので、歌人でもある兼好がそのような視点で書いているとも考えられる。

「浅茅が宿に昔をしのぶ」については、「源氏物語」の桐壺において、更衣を亡くした帝が更衣をしのんで更衣の母に歌を送る場面や、「伊勢物語」において、男が会えなくなった女をしのび「月やあらぬ」の歌を詠む場面などが想定される。

10あだなる契り　（恋人との）はかなく、果たされることのない約束。恋人と、将来結婚しようと約束したが遂げられずに恨み嘆くのである。

11思ひやり　「やる」は、付く動詞の動作が「遠くまで及ぶ」の意となる補助動詞。

11浅茅が宿　「浅茅」は丈の低い茅のことで、荒涼とした場所を形容するのに用いる。「浅茅が宿」は浅茅が生い茂るような荒れ果てた家。恋人とともに過ごした家も、恋が終わって時が経ち、今となっては荒れ果ててしまったのである。

11色好む　「恋の情趣が分かる」。現代語の「好色」とは異なり、恋愛を通じて物事の美や情緒を解し、それに引かれる心が強いことを言う。これがほめ言葉であることを、ここでは理解させておきたい。

13望月の…　この一文は構造が複雑である。大筋は「望月のくまなき」よりも、明け方近く出た月の「木の間の影」「群雲隠れのほど」のほうが「あはれ」であるということになる。いろいろ説明はされているが、曇りない月よりも、欠けていたりちょっと隠れていたりする月がよい、という作者の主張を再度詳しく説明しているのであろう。

13千里の外　「はるか遠い所」。脚注に引かれている漢詩から和歌に引かれたものなどを参考にしているのだろう。漢詩の意味は「今夜は十五夜で満月がでているが、それを見て遠く離れた旧友のことを思いやっている」。

13ながめたる　下に「ほど」を補って考えると下文の「（群雲隠れの）ほど」と対応していることが分かりやすい。

13待ち出でたるが　「出でたる」の下に「月」を補って考える。「待ちに待ってようやく出てきた月が」。「が」は主格を表す。夜半過ぎに出る下弦の月で、夜が明けても空に残っている。述語は「青みたる」。

14木の間の影　「影」は、ここでは「月の光」のこと。木々の間をもれてくる月の光。月の姿そのものと考えても同じことである。

問　**「木の間の影」（14行目）とは、何のことか。**

答　木の間越しの月の光。

●三七ページ

問　**「またなくあはれなり。」（1行目）とは、何と何とを比べているのか。**

答　満月を眺めることと、欠けた月が木や雲に隠れているのを見ることを比べている。

補　満月を眺めることは何の不足もない状態で、「桜の花の満開の瞬間」と同じである。それより、不足のある状態の月を眺めるほうが「あはれ」だと、作者は説くのである。そのために、いろいろな説明を加えており、文の構造が複雑になっている。どこがどこに掛かるのかを慎重に読み解きたい。

問　**「都恋しうおぼゆ」（3行目）とあるが、それはなぜか。**

答　作者は今、山里にいるが、都には「心あらん友」（物の情趣の分かる友）がいるから。

問　**「さのみ目にて見るものかは。」（4行目）とあるが、ここで作者はどのようなことを主張したいのか。**

答　ものは目で見るだけではなく、その良さを想像しながら、味わうものである。

補　直後の部分に「思へるこそ」とあるのを参考にする。

問　**「いと頼もしう」（5行目）とあるが、どの**

う）」恋

「木の間の影」と下の「群雲隠れ」は並列されており、ともに「ほど」に掛かる。

●三七ページ

1うちしぐれたる　「しぐる」は晩秋から初冬にかけて雨がさっと降ってはやみ降ってはやみする状態を言う。「うち」は接頭語で動詞の意味を強めたり種々の意味を添えたりする。ここでは「さっと」くらいの意。

1椎柴　ブナ科の常緑高木である椎の木のこと。和歌で椎を詠むのに「椎柴」というのによるか。古来、「椎柴の本」「椎が本」は、世捨て人や僧の庵居する所とされる。

1白樫　ブナ科の常緑高木。葉の裏面が白い。椎と同じく、葉の表面に光沢があって硬く、それを「濡れたるやうなる」と形容している。前項の椎柴と併せて、都を離れた山中の情景であろう。

2きらめきたる　主語は「月の光」である。

2心あらん友もがな　「心あり」は、ここでは「情趣を解する」の意。反意語は「心なし」。「ん」は「…ような」の意の婉曲。「もがな」は体言に付いて、他にあつらえ望む終助詞。「…があればなあ、…てほしいなあ」の意。

3都恋しうおぼゆれ　作者は都を離れて、遁世していた経験をここに反映していると考えられる。山里にはいないが、都には「心あらん友」がいるというのである。

4さのみ目にて見るものかは　そうむやみに目だけで見るものだろうか（いやそうではない）。前段落までの例をふまえた上で、そもそもの「月・花」の見方・捉え方について目を向けるのである。本文冒頭の「花は盛りに、月はくまなきを見るものかは」が見る対象について意見を投げかけるものなのに対し、ここでは対象の見方そのものについての見解を強調している。

5閨　寝室。「閨の内ながらも」「春は家を立ち去らでも」は並列で「思へるこそ」にかかる。直接見ずともその情景を心中に想像し思い描く場として挙げられている。

5よき人　教養があり、情趣を解す立派な人。

6ひとへに好けるさま　ひたすら風流を好んでいる様子。

6興ずるさまもなほざりなり　楽しむ様子もあっさりとしている。「なほざりなり」は、かりそめである、いい加減である、真剣でない。だが、ここでは「よき人」のこととして書かれているので、あっさりとしている、適当な程度である、の意味で解する。

ようなことか。

答　想像によってさまざまな情趣が味わえることを頼りがいがあることとしている。

補　何を「頼もし」と感じているのか、読み取る。

問　**「よき人」（5行目）と同じ意味で用いられている言葉と対照的に用いられている言葉とをそれぞれこれ以前の部分から抜き出せ。**

答　同じ意味「こころあらん友」、対比的「かたくなる人」

補　「よき人」とは情趣を解する人のことであることから考える。

問　◉**「色濃く」（7行目）と対照的に用いられている語は、ここでは、何か。**

答　「よそながら」

補　「色濃く」は対象を存分に味わおうとするあまり見苦しい態度や行動につながること。

問　**「よそながら見ることなし。」（12行目）と同じ態度を説明している部分はどこか。**

答　「ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり」。

補　この部分は対象から引いている態度ではなく、しっかり鑑賞していながらそう見えない態度で、それを都会風だと作者は主張しているのである。

問　**本文中から係り結びを指摘してみよう。**

答　「庭などこそ」→「多けれ」
「かたくなる人ぞ」→「言ふめる」
「初め終はりこそ」→「をかしけれ」
「昔をしのぶこそ」→「言はめ」
「きらめきたるこそ」→「おぼゆれ」

補　「ぞ・なむ・や・か」を受けた文節は連体形で結ぶ。係り結びは強意の表現なので、文章を読解するうえでポイントになる、注目すべき部分であることが多い。

問　**反語の文はどのような働きをしているか。**

答　一般論を認めつつ、それに反する作者の主張を展開する足がかりとなっている。

補　「満開の花」「曇りなき満月」「成就した恋愛」という一般的に支持されていることを言い、それはもっともだが、それだけだろうか、と疑問を呈していく。そして、それ以外にも認められる場合を詳しく解説していくのである。この反語を手がかりとして、前問で考えた係り結びを用いて、自分の考えを強調していく。

問　**本文から、作者のどのような自然観照の態度が読み取れるか、まとめよ。**

答　物事の最高の状態がよいということを認めつつも、物事のはじめや終わりにもよさを見いだす態度。

7色濃く　しつこく。前項の「なほざりなり」とは対照的な態度である。その様子は以降の本文「花のもとには〜雪には下り立ちて跡つけ」に詳しく書かれている。情趣に欠ける「片田舎の人」に対する兼好の批判的な記述。

7あからめもせず　脇目もふらず。「あからめ」は短時間目をそらすこと。よそ見。

8まもりて　目を離さずにじっと見る。目守る。

12よそながら見る　それとなく見る。距離をおいて客観的に見ること。「よき人」の「興ずるさまもなほざり」な鑑賞態度と同様の態度である。

鑑賞

教科書の「花は盛りに」の部分は、「徒然草」第百三十七段の冒頭部分である。最も長い章段の一部ということになる。この段は長いだけではなく、作品全体の方向を決めているとも言われる重要な段とされている。作者、兼好の物の見方、捉え方が極めてはっきりとした形で提示されている。そのようなわけで、古来絶賛する人も多い一方、本居宣長のように「つくりみやび」として、激しく非難する向きもある。しかし、もともと兼好は王朝に憧れるところから、この作品を執筆したと言われている。文体も当時のものとは異なり、「擬古文」などと呼ばれる。そのような中で、作者の生きている時代には、失われてしまった「みやび」を復活させることは、たとえそれが頭の中だけのことであったにせよ、貴重なことであったと言わざるを得ない。宣長の主張は宣長の主張として、尊重しつつ、作者の主張にも耳を傾けたい。

さて、この部分では作者は物事の最盛期を尊ぶ風潮に対して一石を投じている。確かに、一番いいときだけを賛美し、それ以外は見向きもしないという人が少なくない。作者はその前後、「初め終はり」にも美が存すると主張する。また、実際に見ることはなくてもその美を味わうことができると言う。この主張は、当たり前のことを言っているようでありながら、なかなかここまではっきりとこう言う人はいないと思わせる主張である。そこが人間観察などにもたけていた作者の真骨頂を示している。人間とその心を観察した結果、作者の発見したことなのであろう。日本人はいい時ばかりではなく、物事のいろいろな面を見てきたように思う。この段とも重なる部分があるが、古来、かなえられない恋をどれだけ多くの歌に詠んできたことか。それを作者は我々に気づかせ、我々のよき伝統を再認識させてくれるのである。兼好の生きた時代にもすでに、「盛り」だけを愛でる人たちが存在したのであろう。そして、今現在も「盛り」だけを愛でる人たちがいる。そのような人たちに向かって、いつも兼好は我々の伝統に目を向けるように促すのである。そういう点では、歌の詞書を取り入れているところなどはいかにもうまい手法である。日本の伝統と日本人の心性を考えるよすががここにはある。

そうした伝統的な美について論じた作者の視点は、やがて美に対する人々の在り方に移る。後半部では情趣を知り、美を解する「よき人」と、風情を解さない「片田舎の人」との対比で兼好の自然観照の態度が明確に表れている。対象と距離を置き客観的な視点で楽しむこと、それは先の「盛り」だけではなく「初め終はり」の美を解する態度と同様で、物事を大きな流れの中で、あるがままに見ることによってこそ美の本質を捉えられるという一貫した美意識によるものである。

また、文章の修辞についても、注意を払いたい。反語と係り結びを巧みに用いながら、自分の考えを強調していく。このような論の主張のし方は、実生活の面でも役立てることができよう。ぜひ、ここから学んでおきたいことの一つである。

参考

「正徹物語」

「『花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは』と、兼好が書きたるやうなる心根を持ちたる者は、世間に、たゞ一人ならでは無き也。此心は生得にて有る也。」　（日本古典文学大系）

「玉勝間」　兼好法師が詞のあげつらひ

「けんかうほうしがつれ〴〵草に、花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かはとかいへるは、いかにぞや、いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかこち、月の夜は、雲をいとひ、あるはまちをしむ心づくしをよめるぞ多くて、こゝろ深きも、ことにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを嘆きたるなれ、いづこの歌にかは、花に風をまち、月に雲をねがひたるはあらん、さるをかのほうしがいへるごとくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくり風流にして、まことのみやびごゝろにはあらず、かのほうしがいへる言ども此たぐひ多し、皆同じ事也、すべてなべての人のねがふ心にたがへるを、雅とするは、つくりことぞおほかりける、（以下略）」　（岩波日本思想大系）

コラム

『徒然草』は本当に「随筆」なのだろうか？

『徒然草』は「随筆」（＝作者の思想・所感・経験などを書き記した作品）である。…という点について、私たち教員はしばしば授業で「常識」として説明するし、この指導書でもそのことを前提として解説を施している。しかし、ここでは、その「常識」に一度「待った」をかけてみたい。渡部泰明氏は近年、『徒然草』は、通常言われるような「随筆」として見るべきではな」く、「思考実験の書であり、表現試行の作品と見るべきだ」という斬新な提言をされている（「言葉によって『心』はどのように表現されるのか」『人文知１心と言葉の迷宮』二〇一四年、東京大学出版会）。

「つれづれなるままに…ものぐるほしけれ」という『徒然草』の序文を思い起こしてみよう。ここには、「とりとめもなくうつろいゆく心を書きとめることの、狂気じみた危うさが吐露されて」おり、それだけに、「心を表現する可能性の模索に務めた自負を込めている」と、渡部氏は指摘する（前掲書）。固定的な説明を施しがたい、不安定な「心」のありようを綴った作品が『徒然草』であるならば、作者の思想がありのままに反映される「随筆」として分類することにはいささか違和感を覚える、というのである。

以上の渡部氏の指摘をヒントにしながら、「ある人、弓射ることを習ふに」を再読してみたい。「この章段が一体何を伝えようとしているのか？」という問いに対して、授業では章段全体を貫く包括的な解答を生徒に求めることが多い。「弓射ることを習ふ」「道を学する」という二つの話題に共通する「戒め」を読み取らせようとする試み（→研究１）などは、その代表例といえよう。

しかし一方で、「この一矢に定むべし」という前半の力強い言説が、後半ではいつの間にか「ただ今の一念において、直ちにすることのはなはだかたき」という自信なさげな物言いに変容しており、必ずしも固定化された作者の思想が語られているわけではないようにも考えられる。むしろ、作品を素直に解釈すればするほど、論点がとめどなく変化してゆくなかで全体を貫く主題が形成される点も、この章段の特徴と言えるのではないだろうか。

従って、研究１の解説の際には、「共通点を見出すことも大切だけれども、前半から後半にかけて、次第に論点がずれていくことにも着目しよう」という具合に、あえて異なる視点を示すのも興味深い提案になると思われる。人の心は絶え間なくうつろいゆくもので、その揺れ動く心の動きを文章化するという困難な作業に挑戦した作品が『徒然草』なのではないか。固定的な観念に捉われず、一歩距離を置いて「常識」を相対化する視点を、『徒然草』は与えてくれているのではないか。「常識」に捉われない、新しい発想を積極的に授業に取り入れることは、私たち教員自身が『徒然草』を楽しむために必要な姿勢なのかもしれない。

（小林　俊洋）

《板書例》1　作者の主張（～～～は一般論）

（花）花は盛りに、…のみ見るものかは。
↓見どころは満開の桜だけではない。

（男女の情け）ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。
↓一途に逢って契りを結ぶことだけではない。

（月）望月のくまなきを…よりも、…。
↓曇りのない満月を眺めるよりも…。

《板書例》2　鑑賞態度の違い

情趣のわかる人　「なほざり」「よそながら」　粋

↔

片田舎の人（情趣のわからない人）　「色濃く」「ねぢ寄り立ち寄り」「あからめもせず」　無粋

深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **本文で作者が好ましく思っている「花」「男女の情け」「月」の状態は、それぞれどのようなものか、まとめてみよう。**

【答】 花…満開のときだけではなく、今にも咲きそうなときや散ってしまったあとも好ましい。場合によっては花そのものを見ないで、その美しさを思うことも情趣がある。
男女の恋愛…うまくいったときばかりではなく、うまくいかなかったり、別れてしまったり、逢えなかったりしても情趣がある。
月…満月の曇りのないときだけではなく、欠けた月が木や雲に隠されて見えるのも趣深い。また、木の葉の上に光がきらめいているのも趣深い。
▼ポイント▲ 本文を正確に解釈したうえで、それぞれの情景を頭の中で思い浮かべさせるのもよいと考えられる。旧来の伝統的な価値観の中では必ずしも完璧とはいえない風景や事物の中にも美しさを見出す作者の態度を押さえておく。

2 **「よそながら見る」（三七・12〜13）とは、どのような態度のことを言うのか、考えてみよう。**

【答】 さりげなく見る、客観的な態度。
▼ポイント▲ 情趣を感じるその場にいると興奮状態となり、すべてが好ましく感じられることもあるが、その時期が過ぎてしまうと、どうしてあれほど熱狂したのかわからなくなることもある。盛りの時に、そのようなことを思い起こして、一歩下がって見ることを作者は求めているのである。そして、それが盛りだけを好ましく見るのではない態度につながっていくと考えられる。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部の助動詞の意味と活用形を、それぞれ確認してみよう。**
(1) **咲きぬべきほどの梢（三六・3）**
(2) **はやく散り過ぎにければ。（三六・5）**

【答】 (1) 強意の助動詞「ぬ」の終止形　(2) 完了の助動詞「ぬ」の連用形
▼ポイント▲ 助動詞「ぬ」には完了と強意（確述）の二つの意味がある。強意の意味になるのは、後に「む」「べし」「らむ」「まし」などの推量系の助動詞が接続した場合で、それ以外は基本的に完了の意味になる可能性が高い。

言語活動の解答例

1 作者の論の立て方の特徴についてまとめ、その立論のしかたをどのように考えるか、話し合ってみよう。

【答】（意図）この段の論の立て方には特徴があるので、それを理解し、作者がどうしてそのような手法をとったのかを考えてみたい。

（手順）

1　作者の論の立て方の特徴についてまとめる。

　一般論を否定したうえで、作者独自の主張について説明していく。係り結びの結びの省略の部分がそれに当たるが、作者はまず一般論を否定する。それぞれの項目において、盛りのときだけに注目するのではなく、その前後にも情趣を感じるべきことを具体例を挙げて説明するのである。

2　作者の立論の仕方を肯定的に捉えるか、否定的に捉えるかを考えさせ、どうしてそのように捉えたかを説明させる。

　多くの論説文が一般論を否定するところから始めて、作者の主張に結び付けていることを考えると、作者のやり方を肯定する考え方となろう。まして、作者は一般論を完全に否定しているわけではなく、それを認めつつ話を広げるなど周到に論を準備していると思われる。一方、やはりそれぞれの項目における盛りの時期は逃してはならないものであり、その絶頂を味わえばそれでよいという、作者のやり方を否定する考え方も可能である。いずれの立場にせよ、根拠を持って各自の考えを主張することが肝要である。

（ゴール）現代の論説文にも通じる一般論と作者独自の主張との関わりをしっかりと読み取らせたい。その上で、どちらのやり方に説得力を感じるのかを判断しておくことは、自分自身で説明的な文章を書く際にも役立つであろう。

（畠山　俊）

参考　つれづれなるままに　（序段）

要旨

暇に任せて、とりとめもないことを心のままに書きつけていると、妙に落ち着かない気分になる。

構成

全文一段落。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

語	品詞
①つれづれなる	形動ナリ・体
まま	
に、	格助・状態
日暮らし（ひくらし）	副
硯（すずり）	
に	格助・対象
向かひ（むかひ）	ハ四・用
て、	接助・単接
心（こころ）	
に	格助・場所
うつりゆく	カ四・体
よしなしごと	
を、	格助・対象
そこはかとなく	形ク・用
書きつくれ（かきつくれ）	カ下二・已
ば、	接助・順偶
あやしう	形シク・用・（ウ音）
こそ	係助・強意（係）
ものぐるほしけれ。	形シク・已（結）

①しなければならないこともなく手持ちぶさたなのにまかせて、一日中すずりに向かって、心に（浮かんでは消えて）移り変わっていくとりとめのないことを、何ということもなく書きつけると、妙に感興が湧いてきて抑えがたいほど気持ちが高ぶってくることだ。

指導上の注意点と発問例

●三八ページ

問　この一文の構成はどのようになっているか。

答「つれづれなるままに」「日暮らし」「硯に向かひて」「心にうつりゆくよしなしごとを」「そこはかとなく」の各部分が「書きつくれば」に掛かっていく。その全部が確定条件として、「ものぐるほしけれ」を導いている。「あやしうこそ」は「ものぐるほし」を修飾している。

補「書きつくれば」に掛かる部分は順に「執筆動機」「執筆場所」「執筆対象」「執筆態度」を示していると言われる。「徒然草」の成立について、説明することができる。

問　この一文を暗唱してみよう。

補すでに中学校などでこの部分の暗唱を経験している者もいるかもしれない。人口に膾炙した名文であるので、そのような生徒も含めて今一度暗唱させたい。全体の意味は文の構成を中心に図示する程度にして、細かい意味にあまりこだわらず、とにかく覚えさせたいものである。

問　この序段について、次の問いに答えなさい。

(ア)「徒然草」執筆の動機となった心境を表す語句を抜き出しなさい。

(イ)「徒然草」の内容・題材となっている対象は何だと言っていますか。本文中から抜き出しなさい。

(ウ)執筆の態度を表す語句を抜き出しなさい。

(エ)作者の感想を本文中から抜き出しなさい。

答(ア)つれづれなるままに

(イ)心にうつりゆくよしなしごと

(ウ)そこはかとなく

(エ)あやしうこそものぐるほしけれ

問　この序段には、「徒然草」執筆における次の事柄が述べてある。それぞれに該当する部分を本文中から抜き出しなさい。

(1)動機（執筆動機となった心境）

(2)内容（執筆の対象）

(3)態度（執筆の態度）

(4)感想（執筆時もしくは執筆後の感想）

答(1)つれづれなるままに

(2)心にうつりゆくよしなしごと

(3)そこはかとなく

(4)あやしうこそものぐるほしけれ

問　「心にうつりゆく」（10行目）の「うつりゆく」を(1)「移り行く」、(2)「映り行く」、の二通りに考え、それぞれの場合の意味を本文に即して述べなさい。

答(1)心に浮かんでは消え、消えては浮かんで、次々と交代して移り変わっていく　(2)次々と映像として立ち現れていく

問　「あやしうこそものぐるほしけれ。」（11行

語句の研究

●三八ページ

10つれづれなる　この語は、古来、さまざまな意味が考えられている。「徒然草」執筆の動機を説明しているという立場から、「しなければならないこともなく、暇で、手持ちぶさたな状態」の意とした。他に、「寂しい心情」「安らかな心情」「煩悩のある状態」などの説もある。ここでは形容動詞の連体形として用いられているが、「つれづれ」という名詞の形、「つれづれと」という副詞の形で用いられることもある。

10ままに　「…にまかせて、…に従って」の意。「まま」を形式名詞、「に」を格助詞としたが、「ままに」を一語と考え、形容動詞、副詞、副助詞とする説もある。

10心にうつりゆく　「うつりゆく」には、「移りゆく」と「映りゆく」の二説がある。「うつる」と「ゆく」の複合動詞の場合、ほとんどが「移りゆく」と解釈できる。しかし、ここでは上の「心に」には「映る」の意味で続き、「移り」「ゆく」と続いていくと考えるのがよいだろう。「心に映り、それが移り変わってゆく」。

目）の「あやしう」について、

A
[易]**「あやしう」のここでの意味を次の中から選びなさい。**

(ア)不思議に　(イ)珍しい　(ウ)疑わしい
(エ)気がかりだ　(オ)見苦しい

B
[易]**「あやし」には、①「不思議だ」②「珍しい」③「疑わしい」④「気がかりだ」⑤「見苦しい・粗末だ」などの意味がある。本文中の「あやしう」は、そのどれに当たりますか。**

答 A (ア)　B ①

問 **「ものぐるほしけれ。」（11行目）とあるが、それはどの程度の「ものぐるほしさ」ですか。**

答 「あやしう」と思うくらい。我ながら不思議だと思うくらい。

問 **「つれづれなるままに」（10行目）であることが、なぜ「あやしうこそものぐるほしけれ。」（11行目）という心境を生むのか、次の中から選びなさい。**

(ア)暇に任せて書くと、自分を見つめることにつながるから。
(イ)暇に任せて書いていると、来世に来た思いがあるから。
(ウ)世俗に心紛れずに書くことが、来世を直視することになるから。
(エ)世俗に心が紛れて書くことで、真実を直視できるから。
(オ)異常なほどに心が乱れて、現実を直視できないから。

答 (ア)

問 **この序段の末尾に「ものぐるほしけれ。」（11行目）とあるが、何がそうなのか、二通り考えてみよう。**

答 ・作者自身（の心）　・書き上がったもの

10よしなしごと　名詞「よし（由）」＋形容詞「なし（無し）」＋名詞「ごと（事）」が一語の名詞となったもの。「特に訳もないこと、とりとめのないこと」の意。

11そこはかとなく　ここでは、「決まった形式で書いているのではない」という作者の執筆態度の説明になっている。

11ものぐるほしけれ　「ものぐるほし」の意味は「狂ほし」に引かれて、「狂気じみている」という強い意味を採る説もあるが、ここではそのような意味ではなく、「妙に感興が湧いて、抑えがたいほど気持ちが高ぶってくる」くらいの意味であろう。また、ここの主語にも、「作者自身の心」とする説と「書き上がった物」とする説とがある。「ものぐるほし」が人の動作・状態を多く示すこと、「書きつくれば」から続いていることを考え併せて、前者で解釈したが、後者なら、このような妙な文章ができたという意で、謙遜の気持ちを表したものになる。また、前者の場合でも、正常な気持ちでいられなくなるという意味で、一応自分や自分が書いたものに対する謙遜の気持ちを含んだものと言えよう。なお、「こそ」の結びで、已然形となっている。

鑑賞

この序段は随筆という文章の成立条件をあますところなく伝えたものとして、評価の高いものである。短いながらも、歯切れが良く、古来、親しまれてきた名文である。ぜひ、暗唱させて、生徒の心にとどめさせたいものである。

ところで、「あやしうこそものぐるほしけれ」という末尾の部分については、十分に読み味わわせておきたい。これはもちろん、自分が書いた作品に対する謙遜の言葉でもあるだろう。しかし、「ものぐるほし」とは言いながら、自分の作品を冷静に見つめることができなければ、このような書き方はできないのではないだろうか。「徒然草」を読んでいると、しばしば作者の人を見る目の確かさに驚かされる。しかし、それは同時に自分を見つめる目の確かさにも通じるのであろう。それだからこそ、この部分に強い意味を求める必要はないように思う。熱中していることの合間にふと自分を見つめてみたときに浮かび上がってきた気分。それがこの「ものぐるほし」という語で表されているのである。兼好自身にも思いをはせながら、自由に読み味わわせてみたい。

古文を読むために　4

ここでは助動詞を扱っている。助動詞は数も多く、意味や活用も複雑で、文意に重要な役割を担っていることが多い。つまり、助動詞を自由に理解できれば、ほとんどの古文を現代語訳することができると言ってもよい。助動詞の体系全体を頭に入れれば問題はないが、一部だけを丸暗記するのはなかなか至難の技である。初めのうちは、同じ助動詞といっても頻度が相当に違うので、よく出てくるものから身につけるとよいだろう。せっかく覚えても高校の段階ではめったに見かけないものもあるからである。ある程度身につけたら、後はそれ以外のものを機械的に学んでいけばよい。

では、実際に助動詞を身につけるにはどのようにすればよいのだろうか。助動詞は次の三点から押さえて認識することが必要である。

1　どのような語あるいは活用形に接続するのか。
2　どのように活用するのか。
3　どのような意味を表すのか。

ほとんどの助動詞の活用一覧表でもこのような観点から助動詞を見分けられるようになっている。慣れるまでは常に手元に付録の助動詞一覧表を用意しておいて確認しながら、古文に当たるのがよいだろう。

助動詞

用言や他の助動詞に付いていろいろな意味を加えたり、主として体言について述語としたりする働きを持つ、活用のある付属語を助動詞という。いくつかの助動詞が連続して用いられる場合には、その順序に一定の法則がある。使役→受身→打消→完了→過去、完了→推量、打消→断定→過去などの流れがある。例えば、過去の助動詞「けり」には終止・連体・已然形の三活用しかないが、これは未然形接続の打消・推量・受身・使役の助動詞はこの下には接続しないということである。「けり」で表された過去の事態を否定したり、推量したりすることはないからである。連用形がないのも、過去の事態に、さらに完了とか過去とかが付くことがないからである。係り結びも含めて文を終止する位置に置かれることが多い助動詞は当然のことながら、終止形・連体形・已然形があれば事足りるのである。一方、未然形以下命令形まで六活用全ての活用をする助動詞（受身・尊敬・使役・打消・完了・断定・比況など）は活用形に具わる全ての機能が表現可能であるということである。納得できないと理解が進まない生徒にはこのようなことから始めて、助動詞全体の活用表の特性を捉えさせるとよいだろう。また、助動詞を学ぶ際には助動詞相互をなるべく関連づけて学ぶことで微細な意味を区別していることを理解することができる。

◎過去の助動詞

教科書にあるように直接体験過去の「き」と伝聞など間接体験過去の「けり」との違いを理解しておく必要がある。これは、「けり」が、ある事柄で話し手が今まで気づかなかったものに初めて気づき、なるほどこうなのだと合点したり詠嘆したりすることを、断定を避けて述べる場合に用いられたのが原義で（気づき

の「けり」などという）あり、次に、この詠嘆の意が強く出される場合にも用いられ、また、この「けり」がもともと断定を避けた表現であるところから、話し手が体験しない事柄、伝聞した事柄に対して述べるようになったことによっている。また、「き」はカ変・サ変には特別な接続をするので、出てきた時には丁寧な解説を心がけたい。

◎完了の助動詞

完了の助動詞には、その語自身の中に動詞の「あり」を含む「たり」「り」、ナ変動詞「去ぬ」を語源とする「ぬ」、動詞「棄つ」を語源とする「つ」がある。「たり」「り」はラ変動詞を含むのだから、ラ変活用をし、その元の語の意味、存在を含む完了となる。「ぬ」と「つ」は、その元の動詞の意味を含意して、「ぬ」は自然推移的な動詞に、「つ」は作為的な動作に付くという差がある。「つ」「ぬ」が「べし」「む」「まし」のような推量の助動詞と共に用いられると強意（確述）という強めの用法になる。「り」は四段の已然（命令）形とサ変の未然形にしか接続せず、他は全て連用形接続である。

◎打消の助動詞

活用が複雑であることに注意する。正しく識別さえできれば、意味は現代語にも通じるので理解しやすい。

◎推量の助動詞

推量の助動詞はそれぞれが付く活用形によって意味を考えることができる。すなわち、未然形に付くものは、いまだ実在していない事柄を推量しようとするものであり、連用形に付くもの（「けむ」）は過去の事態についての推量、終止形に付くものは、一つの完成体として表現された事態をあえて推量的に表現しようとするものという違いがある。種類の多い終止形接続のものは、視角による推量の「めり」、聴覚に基づく推量の「なり」、確かな根拠による推量の「らし」、強い確信をもっての推量の「べし」、見えない現実に対する推量の「らむ」などがある。これらは現代語ではそれに相当する助動詞がないものも多く、副詞的表現を補って理解しなければならないものである。終止形接続に限らない推量の助動詞全体を見れば、この他にも教科書にあるような「けむ」「らむ」「む」の関係や「む」「べし」「じ」「まじ」の関係などもあるので、さまざまな角度から関連づけて押さえると知識が定着しやすいだろう。「む」については意味の判別をする際に一人称の文に用いられている時は意志、二人称は勧誘、三人称は推量という目安を考えることもできる。また、「む」が仮定・婉曲の意味となるのは連体形の場合だけで、仮定の時は下に「は・こそ・も・が・に」などの助詞が来ることが多く、婉曲の時は下に体言があるか、または省略されている場合が多い。婉曲は現代語訳を無理にする必要がない。また、「むとす」（「と」は助詞、「す」はサ変）が熟合した「むず」という「む」をやや強めた助動詞がある。「まし」は「…せば～まし」「…ましかば～まし」という形でよく用いられ反実仮想（「もし…であったら…だろうに。実際は…ではないから…ではない」と訳す）を表す。

◎断定の助動詞

「なり」「たり」があるが、比較すると「なり」は自然的、永久的であり、「たり」は人為的、一時的という傾向がある。また、断定の助動詞は体言に接続することがあるのも注意を要する。

◎受身・使役の助動詞

助動詞の中でも、「る・らる」「す・さす・しむ」については他の助動詞とは扱いが異なる点がある。これらの助動詞が補助動詞「給ふ」と併用される場合、「給ふ」より上にこれらの助動詞がくる。しかし、他の助動詞にはこのようなことはない。受身や使役の表現は、能動と受動、命令者と被使役者という話し手の外界の捉え方に関わる表現であって、話し手独自の表現ではないことと関連がある。また、受身・使役の表現では、その文の見かけの主語はその動作の仕手ではなく、別に実際の動作の仕手がいるのであり、「る・らる」の自発・可能・尊敬の意味の主語、「す・さす・しむ」の尊敬の意味での主語が実際の動作主であるのとは違ってくるということもある。補助動詞「給ふ」がこれらの助動詞の後に来るのも、「る・らる」「す・さす・しむ」の付いた動詞連語が全体として一つの動詞のように意識されたということの反映であろう。そして、ここに属する助動詞は全て未然形に接続する。

「る・らる」は動作・作用の自然発生的・無作為的であることを示すことからいくつかの意味が生まれている。意味の見分け方についても触れておこう。古文においては無生物が主語になった場合の受身の表現は極めて少ない（ないわけではない）。また、それと区別しにくい尊敬の場合は尊敬の意を表す動詞の下に添えられることが多い。ところが、「る・らる」の下に尊敬の「給ふ」が付いた場合は受身か自発の意味となる。さらに、可能は平安時代では打消か反語の表現の中で用いられるのが普通である。それ以外の場合が自発になるが、自発は心情を表す語（思ふ・嘆く・泣く・眺むなど）とともに用いられることが多い。いずれにしても区別しにくい場合もあるので、前後の文脈も考慮しながら考えていく。「す・さす・しむ」は人為的・作為的に他に働きかける意を表す。単独で出てくる場合は使役である。尊敬の意を表す語とともに用いられると尊敬の場合が多いが、例外も多くある。「す・さす・しむ」を取っても文意が変わらなければ尊敬、文意が通じなくなれば使役という見分け方をする場合もあるが、これも絶対そうだとは言い切れない場合がある。

その他、**願望**「まほし」「たし」や**比況**「ごとし」の助動詞はさほど扱いにくくはないので、出てきた時に触れればよい。

初めにも述べたが、助動詞を正しく捉えることによって文意が理解されることも多い。品詞分解をして、一つ一つの助動詞の文法上の意味を確認し、現代語訳を当てはめて、逐語訳する練習を繰り返すとよい。慣れてくれば、そこまでしなくても現代語訳することができるようになる。いろいろなパターンに慣れることが大切である。

（畠山　俊）

古文の窓❶ 無常の世を生きる

教材のねらい

日本文学に大きな影響をもたらした無常観とはどういうものなのか、そしてどのような意味を持つのかへの理解を深める。とくに中世の文学を生み出す原動力の一つになったことに気づかせ、作品の具体的な表現との関わりを考えさせる。

参考

『平家物語』の序章冒頭（「言語文化」で「参考」として採録）では、無常の理を示したのち、平清盛の話題へと移る。無常観は、栄華を極めた清盛や平家の滅亡のさまを語り起こすきっかけとなっている。歴史を語る原動力となっている。

『方丈記』では、京の都を襲った大火・辻風・遷都・飢饉・地震の五大災厄を克明に描写したのち、次のように述べる。

すべて世の中のありにくく、わが身と栖とのはかなくあだなるさま、又かくのごとし。いはんや、所により、身のほどに随ひつつ心を悩ます事は、あげて計ふべからず。

もしおのれが身数ならずして、権門の傍らに居る者は、深く喜ぶ事あれども、大きに楽しむに能はず。嘆き切なる時も、声を揚げて泣く事なし。進退安からず、立居につけて恐れをののくさま、たとえば、雀の鷹の巣に近づけるが如し。もし貧しくして富める家の隣に居る者は、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつつ出で入る。妻子・僮僕の羨めるさまを見るにも、福家の人のないがしろなる気色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上ある時、その災をのがるる事なし。もし辺地にあれば、往反煩ひ多く、盗賊の難はなはだし。また、勢ひある者は、貪欲深く、独身なる者は、人に軽められる。財あれば、恐れ多く、貧しければ、恨み切なり。人を頼めば、身他の有なり。人をはぐくめば、心恩愛に使はる。世にしたがへば、身苦し。従はねば、狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなる業をしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。

最初の一文は無常観を表している。しかしこの箇所全体で述べていることは、社会の中で生きることの難しさである。五大災厄についての詳しい描写も、平安京という都市で社会生活を営むことの危険さや不安定さを主題としている。無常観が社会のあり方を見据える視点を提供している。

『徒然草』百三十七段（「言語文化」で前半部分採録）の末尾では、

兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける草の庵には、閑かに水石を翫びて、これをよそに聞くといへるは、いとはかなし。閑かなる山の奥、無常のかたき、競ひ来たらざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるに同じ。

と無常の避けがたさが述べられている。ところがこの章段の前半は、満開の桜やくまない月や逢う恋など、物事の盛りの素晴らし

さだけを追求するような、固定観念に縛られた美意識を批判している。無常観は、そういう固定観念を脱するための心構えと、密接に関わっている。

まず、『平家物語』『方丈記』『徒然草』の中から、無常観を表している箇所を探し出すときには、「無常」の語だけではなく、「はかなし、常なし、定めなし」等の語にも注意したい。次には、その後の周辺の叙述に目を向ける必要がある。そこにはしばしば、作者のもっとも述べたい事柄が示されている。無常観は、それらと密接に関係する。無常を自覚するからこそ、ありきたりの見方に囚われることなく、独自の視点から人間やこの世を捉えることができるのである。逆に言えば、無常観は結論なのではなく、それによって認識を改めたり、新たな行動を起こしたりする媒介になる。そのことに何より注目させたい。

以下、その他の無常観の例をいくつか掲出する。

『平家物語』

祇王…「つくづく物を案ずるに、娑婆の栄花は夢の夢、楽しみ栄えて何かせむ」

入道死去…「忠を存ぜし数万の軍旅は、堂上堂下になみ居たれども、是は目にも見えず力にもかかはらぬ無常の殺鬼をば、暫時もたたかひかへさず」

先帝身投げ…「悲しき哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたをちらし、なさけなきかな、分段のあらき浪、玉体を沈め奉る。」

『方丈記』

「若し跡の白波にこの身を寄する朝には、岡屋に行きかふ船をながめて満沙弥が風情を盗み」

「をのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠もり居てのち、やむごとなき人の隠れ給へるも、あまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽くしてこれを知るべからず」

『徒然草』

第二十五段…「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、楽しび悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変はらぬすみかは人改まりぬ。」

第三十段…「人の亡き跡ばかり悲しきはなし。」

第四十一段…「我らが生死の到来、ただ今にもやあらん。」

第四十九段…「人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。」

第五十九段…「無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを。」

第七十四段…「常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。」

第九十一段…「その故は、無常変易の境、ありとみるものも存ぜず、始めあることを終わりなし。」

第百五十五段…「死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後ろに迫れり。」

第百八十八段…「人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。」

第百八十九段…「不定と心得ぬるのみ、まことにて違はず。」

第二百十一段…「よろづのことは頼むべからず。」

第二百四十一段…「如幻の生の中に、何事をかなさん。」

解説

およそ無常観ほど生徒たちに共感しにくい思想はないかもしれない。春秋に富んだ若い人たちにとって、あらゆるものは衰微し、死滅する、といわれても実感に乏しいに違いない。頭では理解しても、同感はしにくいだろう。ここでは、文学の上で無常観が大きな働きをしていることを理解することを通じて、無常観の積極的な意義を感じ取らせたい。無常観には、表現行為の推進力になっている面があるのである。

そもそも無常とは、仏教の観念の上からは、あらゆる物事を覆う観念である。ところが、『平家物語』の冒頭では、「奢れる者」「猛き者」の滅びの運命が語られている。本来の無常観であれば、富貴にかかわらないのだから、「盛者必衰」ではなく、「生者必滅」というべきなのである。栄花を極めた者でも滅んでいくというのは、本来の無常観からいえばその改変であり、限定的なとらえ方となっている。しかしそれによって、平家の衰亡の歴史を語る原動力になったことに注意したい。歴史というのは無数の事象の集積であり、それを語るには、語るべき事柄を選択し、一連の出来事として配置する必要がある。日本的な無常観は、歴史的な事柄の中からどれを選択し、どのように物語化するかについての、有力な視点を提供したのである。

冒頭の一文に端的に表されているように、『方丈記』は、人と栖（すみか）の無常を訴えることが作品の主題である。栖は社会と人の接点となる存在だが、同時に、栖と人との関係は、社会と人との関係と類比することができるように描かれている。それゆえ、栖の無常さを述べることが、社会のうつろいやすさ、不安定さを述べることにつながり、ひいてはその社会でいかに生きるべきかを追求する推進力になる。ここでも無常観が叙述の原動力になっていることを確かめたい。

『徒然草』という作品の魅力は、何といっても、自由で囚われない、それでいて物事の本質を鋭く見抜く作者のまなざしである。こういう視点は、どうやって獲得されたのだろうか。解答例で取り上げた、第百三十七段の末尾の段落では、「兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。」と、死を覚悟した兵士にこそ無常を克服する可能性があることを示唆している。もとより彼らが、「花は盛りに月はくまなきを見るものかは。」というような美意識をもっているわけではない。むしろそうした美意識からは対極にあるといってよいだろう。この章段の中段のあたりでは、「片田舎の人」が、美しいものに対して「色こくもて興ずれ」というありさまで、彼らが祭りを見る様子も、見ものばかりにこだわって見苦しい、と否定的に扱われている。「兵」などは、その「片田舎の人」に入るはずの存在だろう。また末尾の段落では、草庵で自然を愛し、閑寂な生活を送っている遁世者が、無常から逃れえたと考えることも、愚かしいと否定している。この章段の始めの方では、深山の杉の木陰から見る月などを、「またなくあはれなれ」と賞賛していた。この月を見る人物こそ、草庵を栖とする遁世者に違いない。つまり、最後に至って、これまで自分が述べてきたことを否定しているのである。どういうことだろうか。第百三十七段は、冒頭から、固定観念に囚われた美意識や価値観を排除しようとしていた。「何となく葵懸け渡してな

まめかしきに」以下の後段も、集団の中に埋没しうると考える愚かしさを、無常観を媒介にして指摘することが主題と見られる。固定観念とは、別の言い方をすれば、旧来の発想の中に埋没することだから、この後段は固定観念を打破すべしとする前段の趣旨につながりうる。とすれば、末尾の段落は、固定観念に囚われるなという趣旨自体が固定観念となることを否定しようとしているのではないか。いわば、固定観念の打破を自ら実践しようとしていると考えられるのである。この章段の文章が自信に満ちているのは、そこまで自分を追い詰めた、という確信があるからだろう。無常観は、作者の自由な発想や視点のよりどころとなり、囚われを排せよという力強い文章をとことんまで書き切る原動力となっているのである。そのことに、ぜひ気づかせたい。

（渡部　泰明）

単元の言語活動２
作者の主張を読み取る

活動のねらい

古文でも、現代文でも、文章を読む際に書き手の主張を読み取ることは変わらない。書き手の考えであるか、書き手の思いであるかの違いは生じるが、文種が異なっても主張を読み取ると言うこと自体は変わらない。高校の現代文では文章の長さも長くなり、内容も高度になるため、読解することに注力することになり、文章の構造から主張へと簡単に導けるようなことはなかなかない。いっぽう、古文は長さもさほど長くはなく、内容も平易なものが多いため、文章の構造が見えやすく、作者の主張も分かりやすいことがある。ここでは古文を題材にして、今一度、文章の中で作者がどのような主張を行っているのかを読み取る作業をすることをねらいとする。

タイトル・序文の解説

『徒然草』は序文にあるように多彩な内容を含んでいる。その中に作者の主張を述べている章段もある。単元の教材の中からそのような作者の主張を述べている章段を取り上げ、その章段の構成、つまり作者の主張がどのように展開されているかを読み取り、文章を読む際のポイントを確認していく。文章においては作者の主張が初めに置かれるか、最後に置かれるか、両方に置かれるかで頭括式、尾括式、双括式の三種があると言われている。ここでは頭括式と尾括式を取っている章段を取り上げ、その構成を確認する。

「課題」の解説

課題　**「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」から、それぞれ作者の主張が表れている箇所を読み取り、全体の構成がどのように組み立てられているかを確認し、どちらが分かりやすいか、意見を交換してみよう。**

それぞれの教材を読解しているので、作者の主張がどの部分でなされているかは判断が難しくはないであろう。取り上げる二教材についてそれぞれで作者の主張がなされている部分に傍線を付け、その上でグループを作って傍線の箇所を比べてみる。さらに、二教材における作者の主張の文章内での位置の違いに気づかせ、分かりやすさに違いがあるかどうかについても話し合わせるとよい。これらの作業は文章を読解する場合のみならず、文章を書く際にもこの点を意識することで分かりやすくなる可能性がある。そのような点も指摘しておくとよい。

「活動」の解説

1　筆者のもっとも主張したいことがどこに書かれているか、読み取ってみよう。

①　「亀山殿の御池に」（三〇ページ）で、作者がもっとも主張したいことが読み取れる箇所を抜き出す。

②　「大事を思ひ立たん人は」（三二ページ）で、作者がもっとも主張したいことが読み取れる箇所を抜き出す。

教科書に傍線を引かせる、ワークシートに記入させる等の方法で作者のもっとも主張したい部分を確認する。この教材の場合、

「よろづにその道を知れる者は、やんごとなきものなり。」の部分が該当箇所である。一人一人に作業させ、ペアあるいはグループで該当箇所の確認をする。

②「大事を思ひ立たん人は」（三二ページ）で、作者がもっとも主張したいことが読み取れる箇所を抜き出す。

①と同じ作業をこの教材でも行う。この教材の場合、

「大事を思ひ立たん人は、去りがたく、心にかからんことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。」

の部分が該当箇所である。この教材についてもそれぞれが選んだ該当箇所を確認しておく。

知技(1)エ

2　本文中で作者の主張がどのように扱われているか、考えてみよう。

①　「亀山殿の御池に」で、作者がもっとも主張したい部分がどの位置に置かれ、全体の構成がどのように組み立てられているか、確認する。

1で確認した箇所は文章全体の末尾に置かれている。文章はまず二つの集団についての「水車」作成の経緯を対比的に記している。これは具体例に当たる。その具体例から導き出される作者の主張を最後に一文の形でまとめて独立させている。「具体例から作者の主張へ」という説明的文章によくある構成となっている。「水車」作りの失敗と成功という分かりやすい例から、それがどのような要因からもたらされるのかを「その道を知れる人」とまとめて主張としている。当時の人は「宇治の里人」とはどのような人たちかを分かっているから即座に理解できるであろうが、それを知らなくても文章の構成から読み取ることができるということに留意させるとよい。分かりやすい文章の書き方の手本のような文章となっている。

②　「大事を思ひ立たん人は」で、作者がもっとも主張したい部分がどの位置に置かれ、全体の構成がどのように組み立てられているか、確認する。

1で確認した箇所は文章の初めに置かれている。そのうえで、「さながら捨つべきもの」とはどのようなものがあるのかを、こちらの教材でも例を挙げて説明している。こちらの例

の挙げ方はやや一般的な例をまず挙げて、それからより具体的な例を挙げていくやり方を取っている。①では対比的な例の挙げ方であったが、こちらでは例を一般から具体へと進めることで理解を深めるようにしている。説明的文章では最後に作者の主張を再確認することも多いが、ここでは最初に主張を置き、例で終わりにしている。①と②とが対照的な構成になっていることに気づかせる。ペア等で話し合わせれば比較的容易にそのようなことが理解されるであろう。

思判表Ｂ⑴ア

▼評価のポイント▲　作者の主張の読み取りは傍線部の確認やワークシートの確認で行う。構成については発表させたり、ワークシートを確認したりすることで行うことができる。その部分をクラス全体で共有したうえで、次の作業に進むとよいだろう。

3

「亀山殿の御池に」「大事を思ひ立たん人は」における作者の主張の取り上げ方を比べ、どちらが分かりやすいと思うか、意見を交換してみよう。

日本語の文章の場合は最後が重視される傾向があるので前者の教材を分かりやすいと考える生徒が多いと予想される。いっぽう、英語等では最初に大切なことを述べる傾向があるので、後者のタイプの教材が分かりやすいとされる。別に言語の違いを理由に挙げる必要はないが、なぜ分かりやすいと思うのか、その理由を具体的に示して意見を述べさせることが大切である。それぞれの考えをワークシートに記入させたうえで、前者を分かりやすいとした人に理由を発表させ、次に後者を分かりやすいとした人に発表させるなどすることもできる。ワークシートはそのような活動を想定して、発表者の意見を聞きながらメモできるようにしている。両者の主張を聞いたうえで、改めて自分はどちらが分かりやすいか考えさせるのもよいだろう。そして、意見が変わったかどうか、頭括式から尾括式、尾括式から頭括式のどちらへの移動が多かったかを比べるのもおもしろい。

知技⑴ウ　思判表Ｂ⑴オ　主態

発展的学習としては残りの二教材について構成を考えることもできる。「奥山に猫またといふものありて」は説話的文章ではあるが、ストーリーが語られ、最後にオチが付くというやり方は尾括式に近いものがある。「花は盛りに」では冒頭の「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。」という作者の主張について具体例をいくつも挙げながら読み手に納得させようと試みている。いわば頭括式とも言えるであろう。また、『徒然草』は比較的平易な章段も多いので、原文に当たりながら、他の章段についても構成を考えてみるような活動も考えられる。

主態

▼評価のポイント▲　ワークシートを使用する場合はそれを提出させることで個人評価ができる。発表させる場合は自主的な発表者に高い評価を与えるようにする。また、自分の考えが変わる、変わらないを理由とともに確認するような別のワークシートを作成すれば、主体的な取り組みについて調べることも可能であろう。

評価規準

〔知識・技能〕⑴ア　言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。
〔知識・技能〕⑴ウ　我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしている。
〔知識・技能〕⑴エ　文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。
〔知識・技能〕⑵イ　古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的文化的背景などを理解している。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴ア　「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えている。
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑴オ　「読むこと」において、作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めている。
〔主体的に学習に取り組む態度〕　進んで『徒然草』に表れた作者のものの見方、感じ方を捉え、今までの学習を生かして、作者の主張を読み取り、批評しようとしている。

◎学習指導要領の言語活動例との関連
〔思考力・判断力・表現力等〕B⑵イ

（畠山　俊）